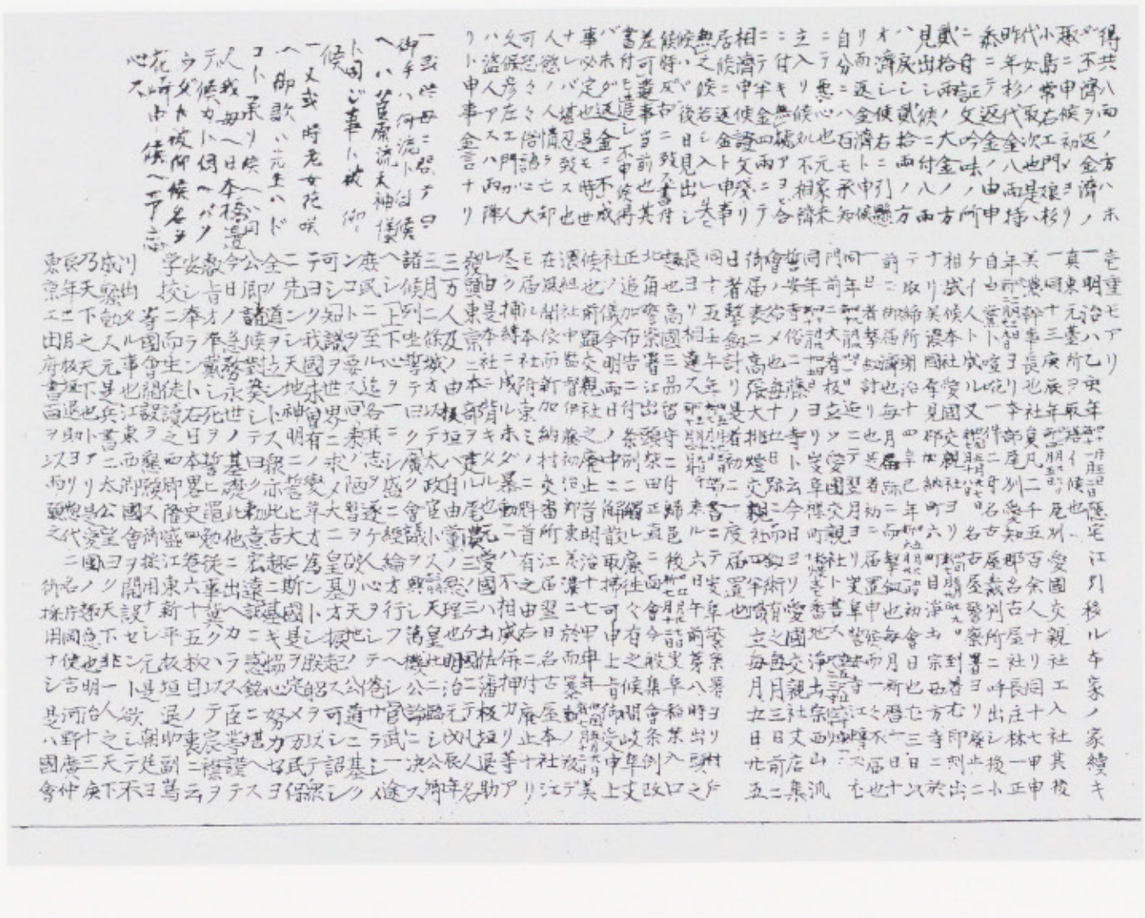
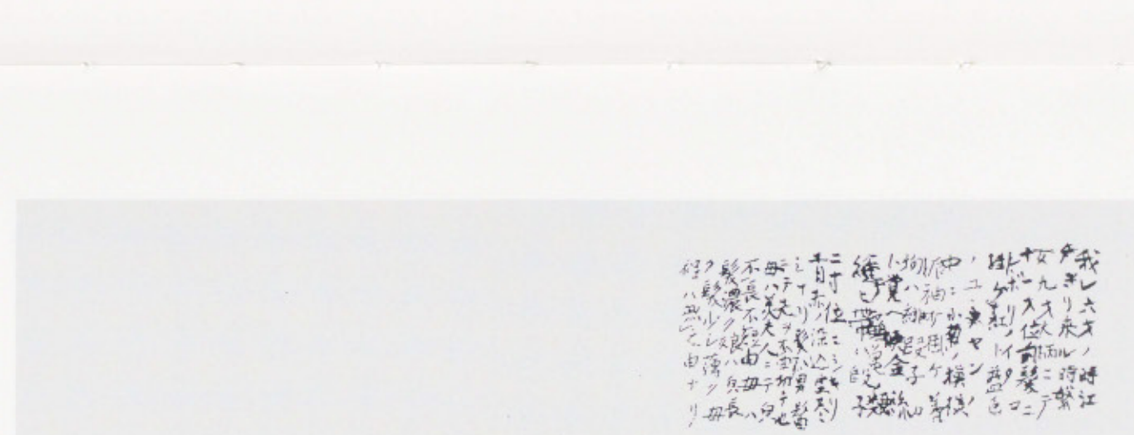
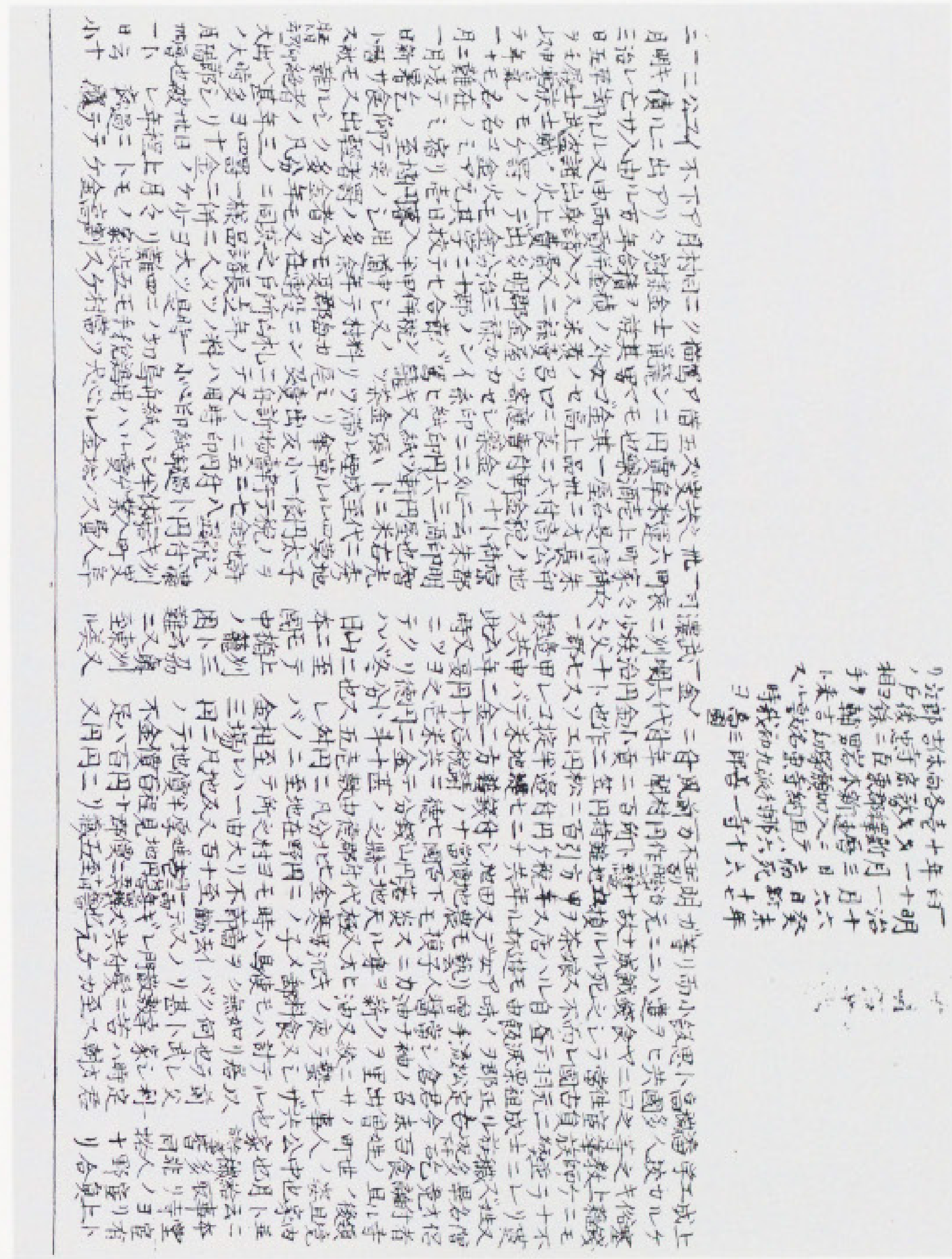
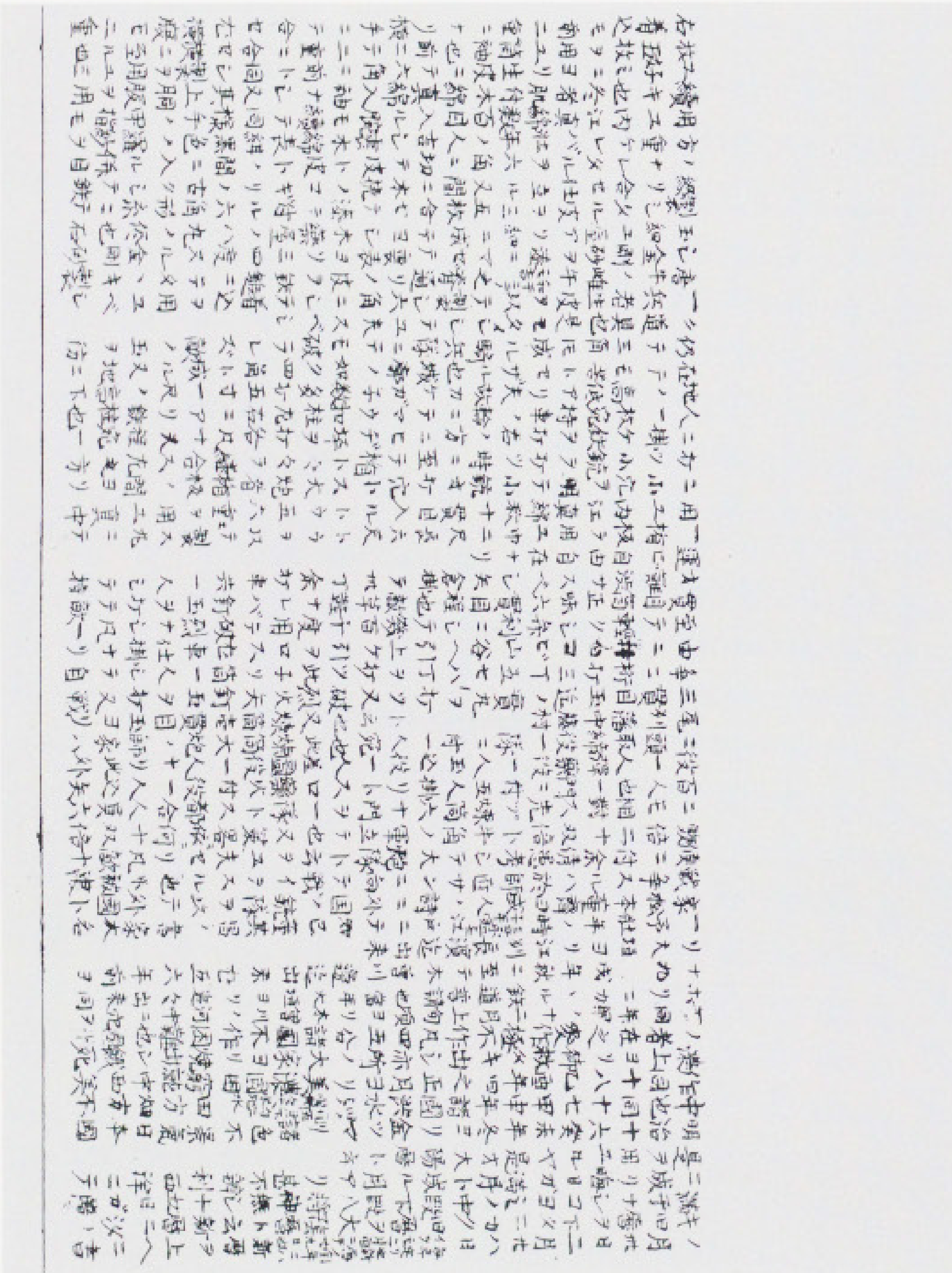
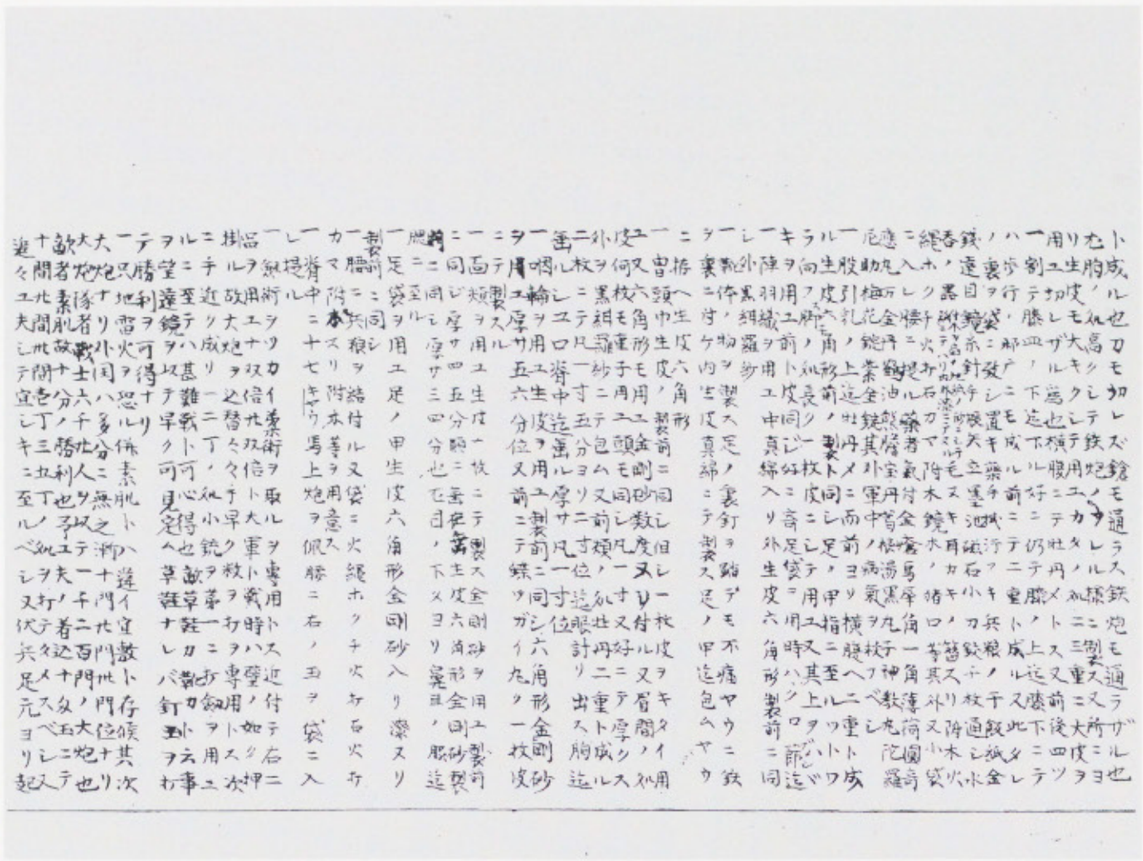
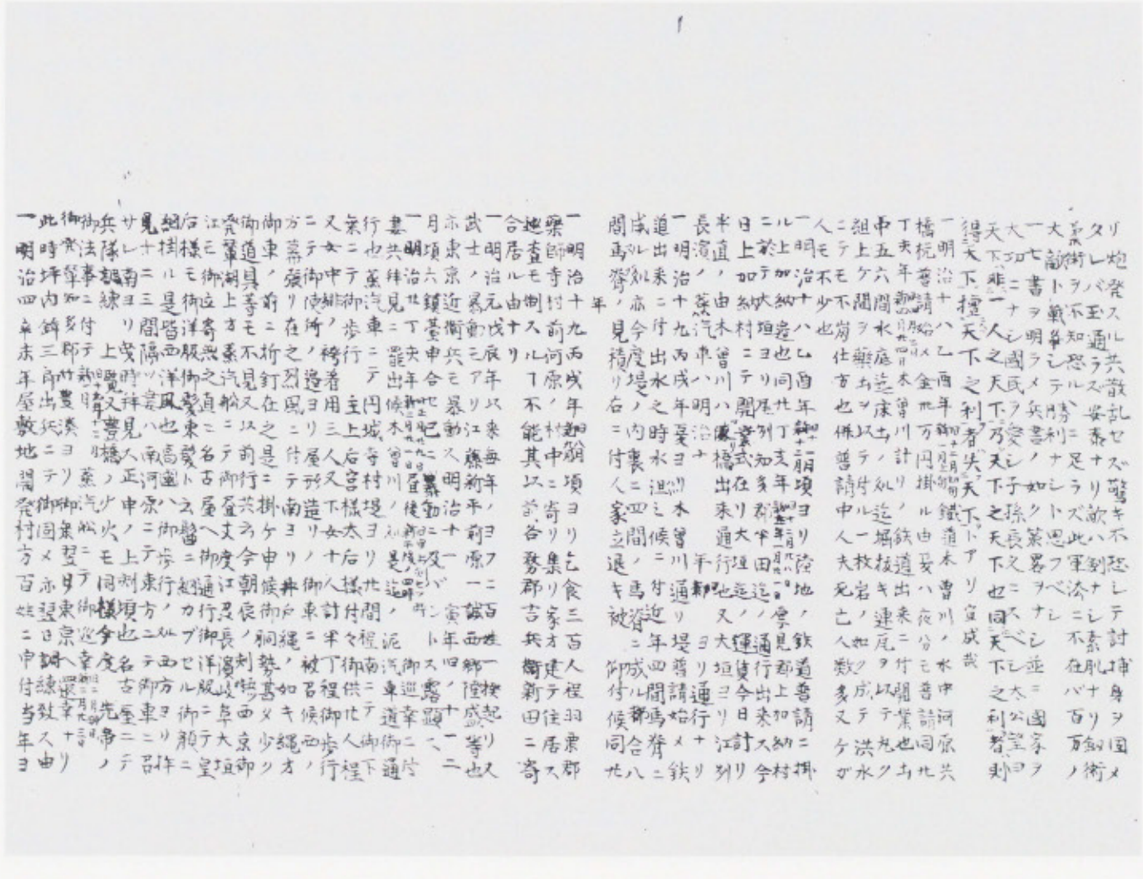


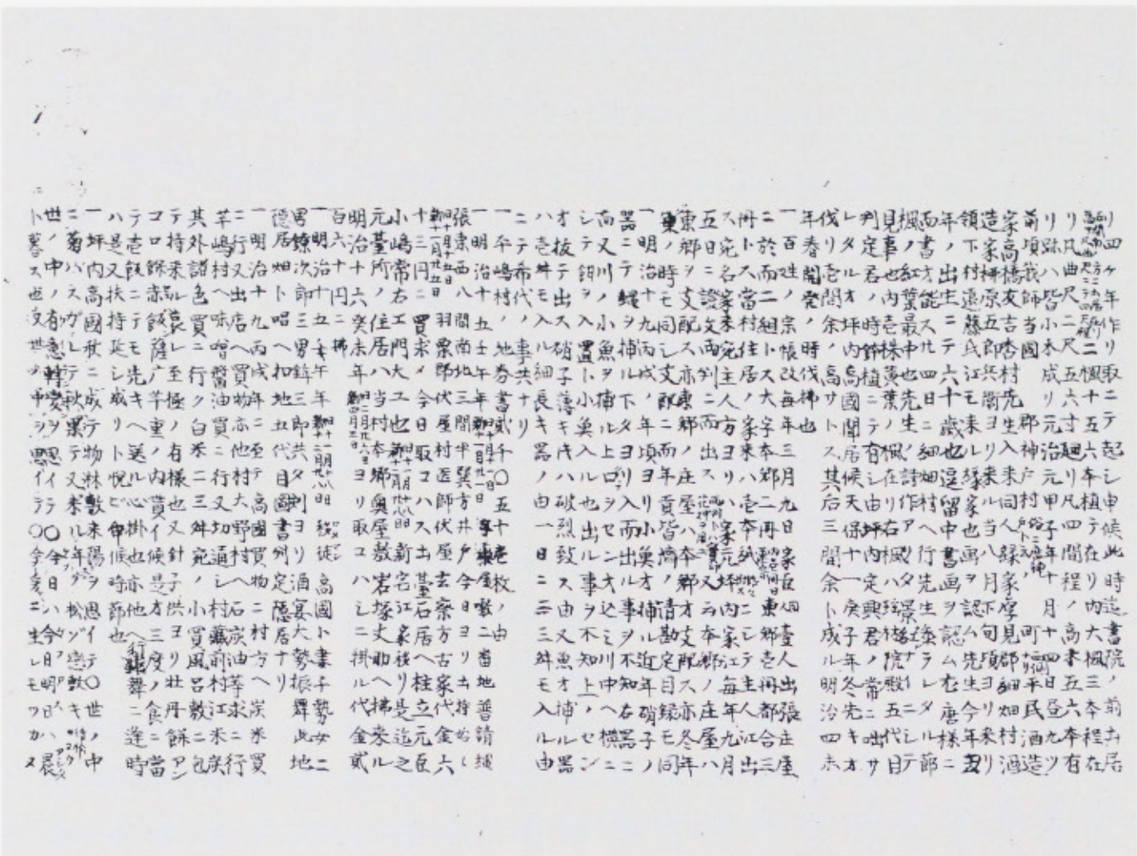


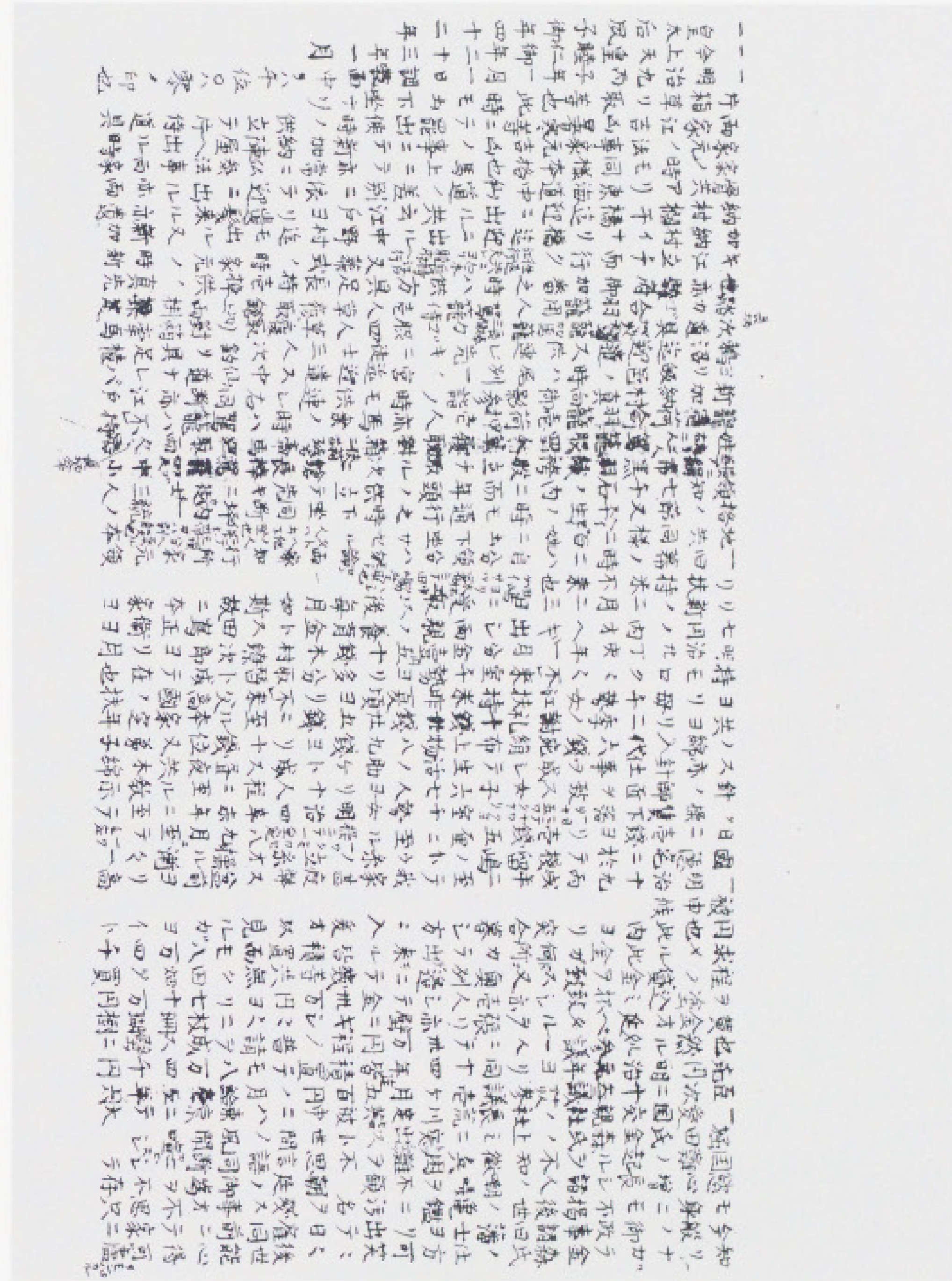


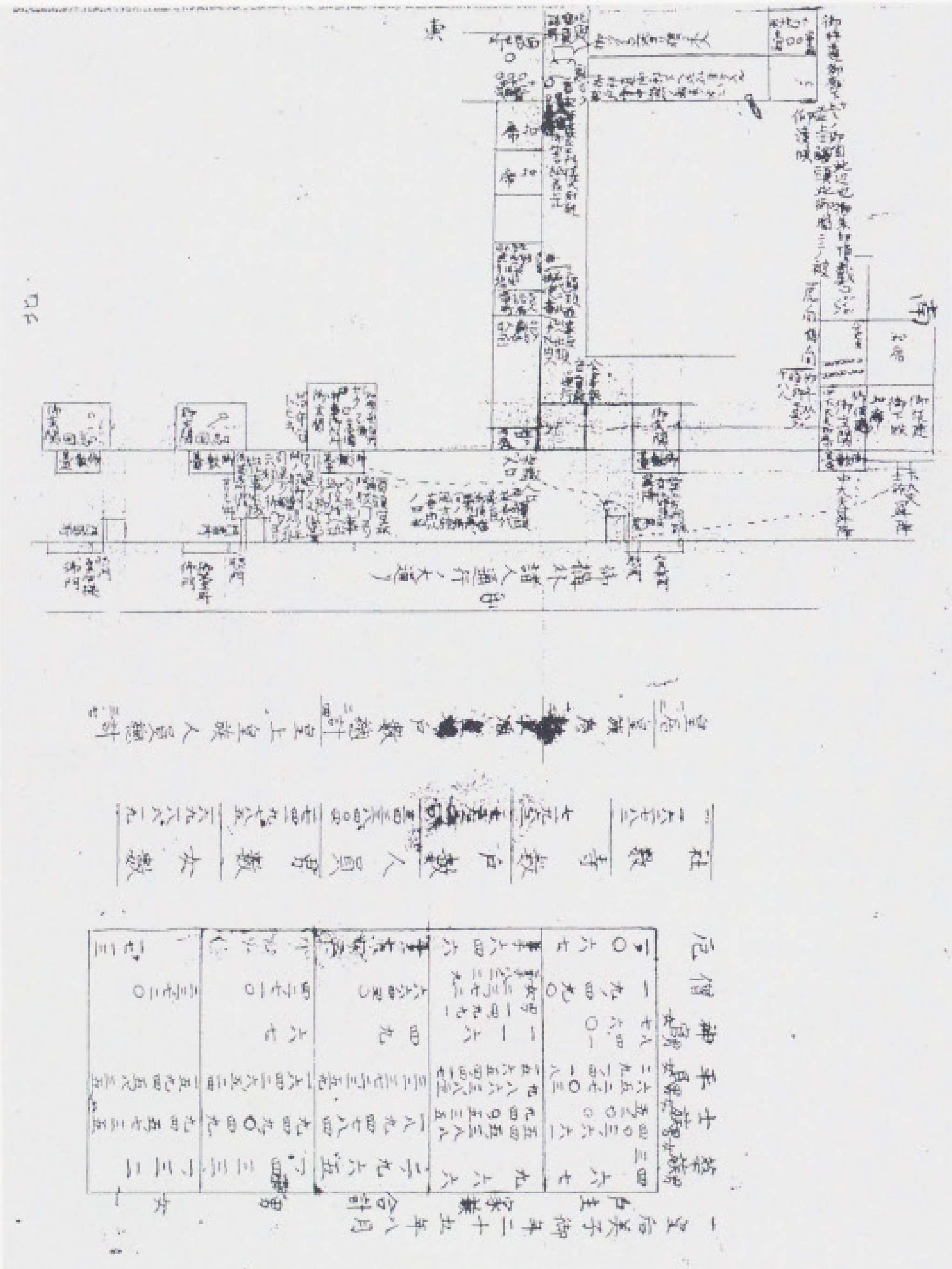


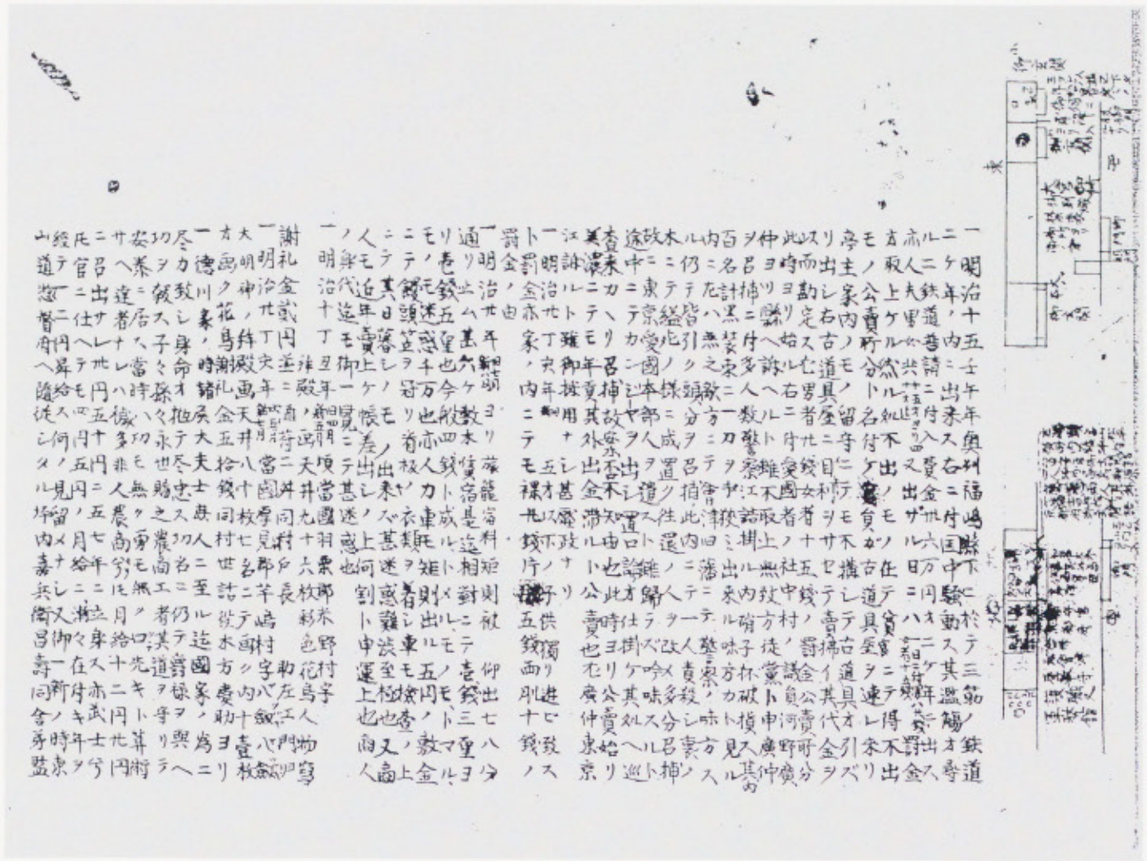


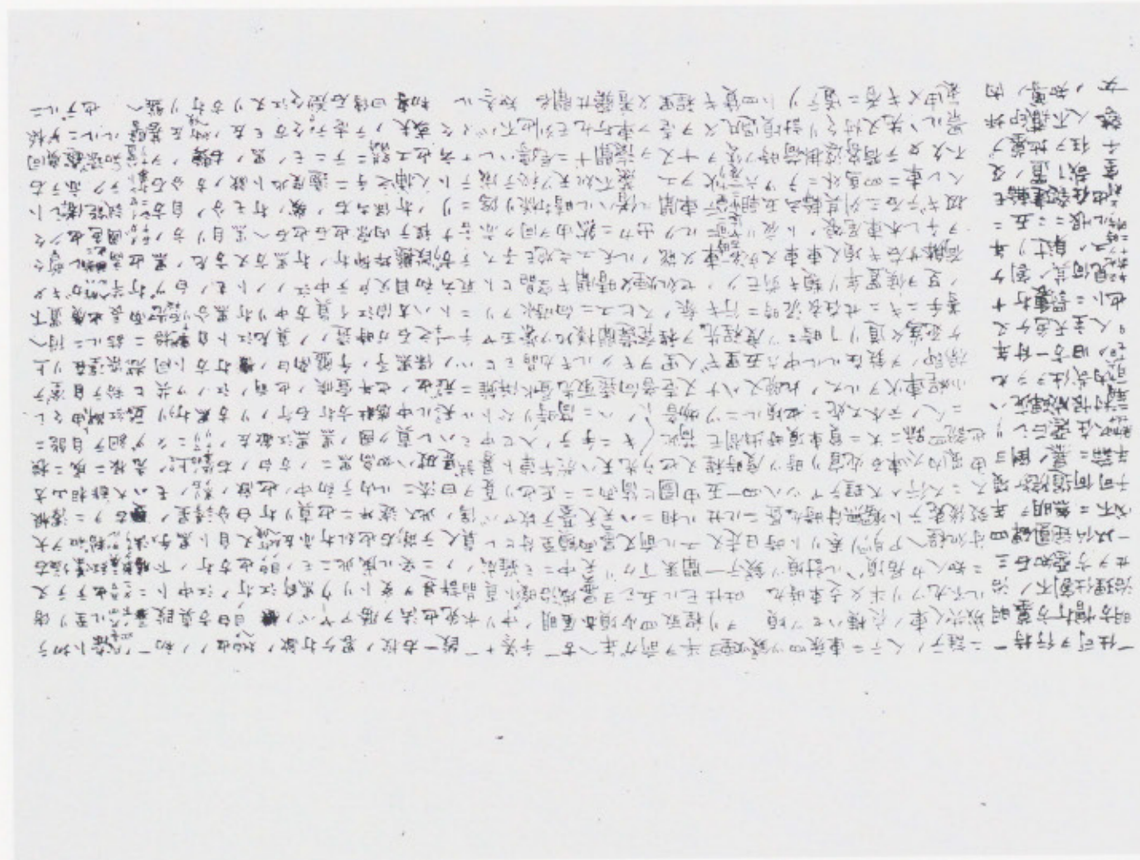


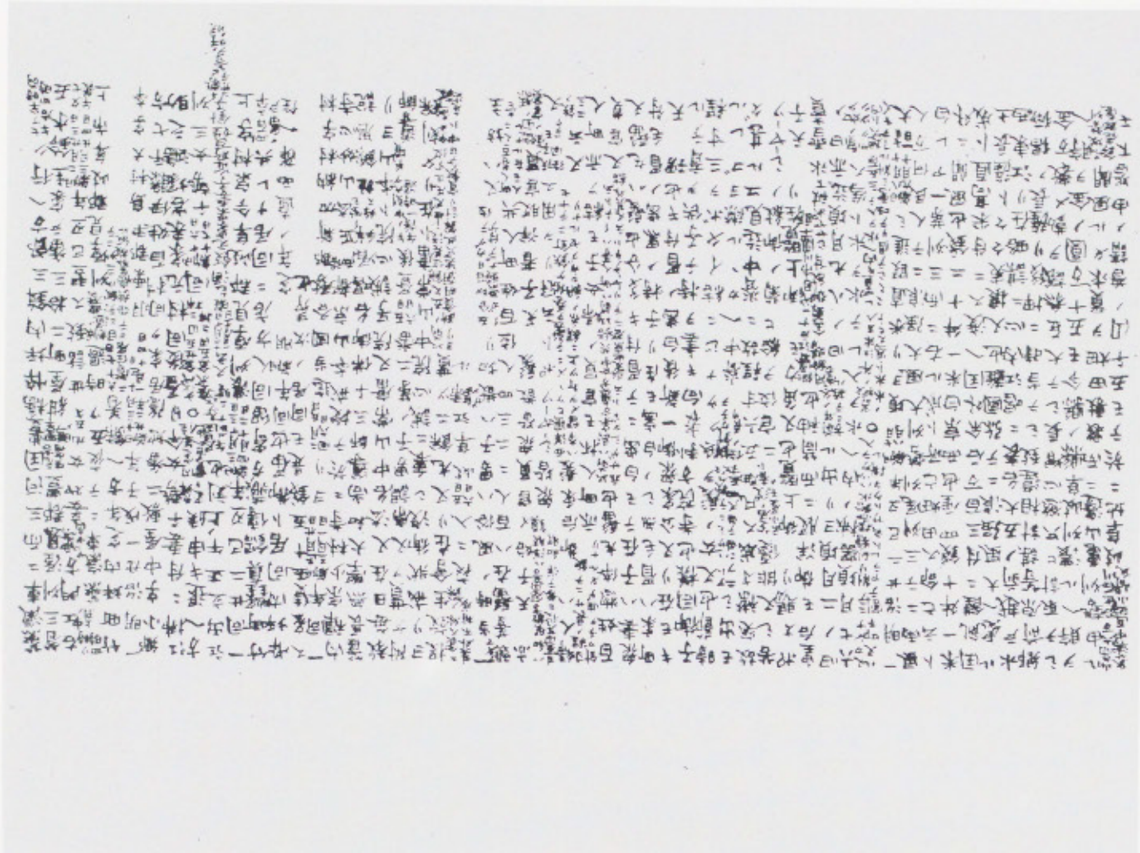


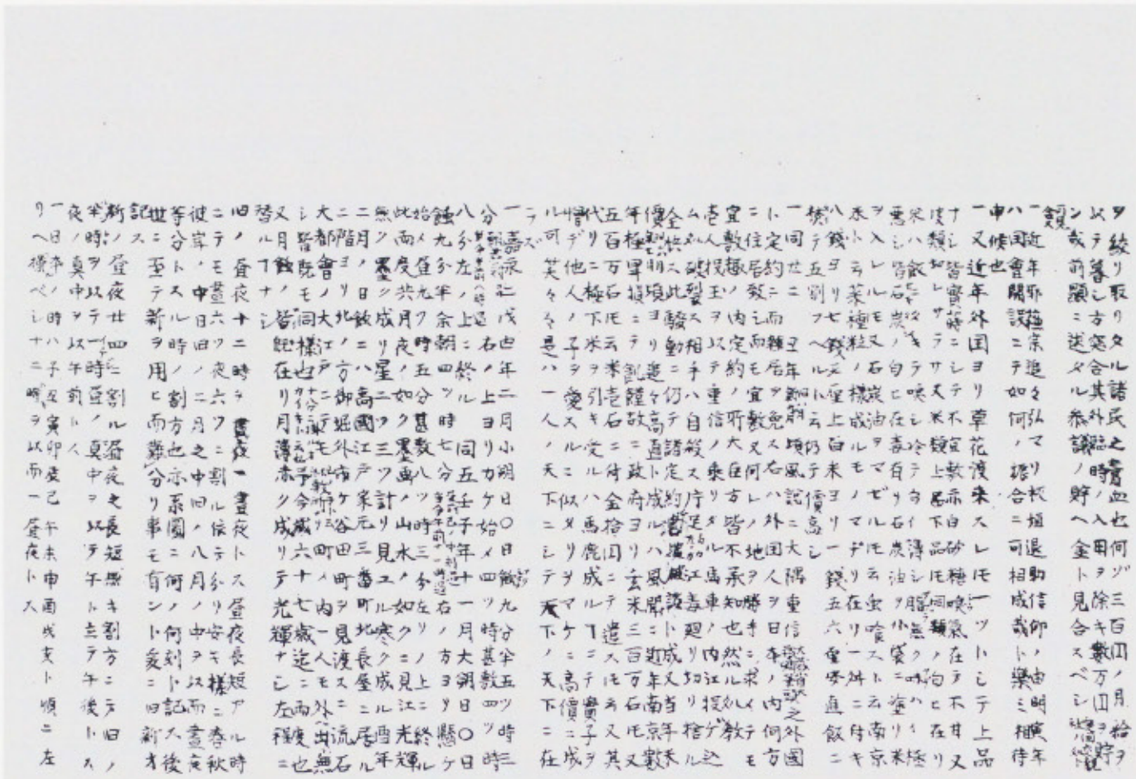


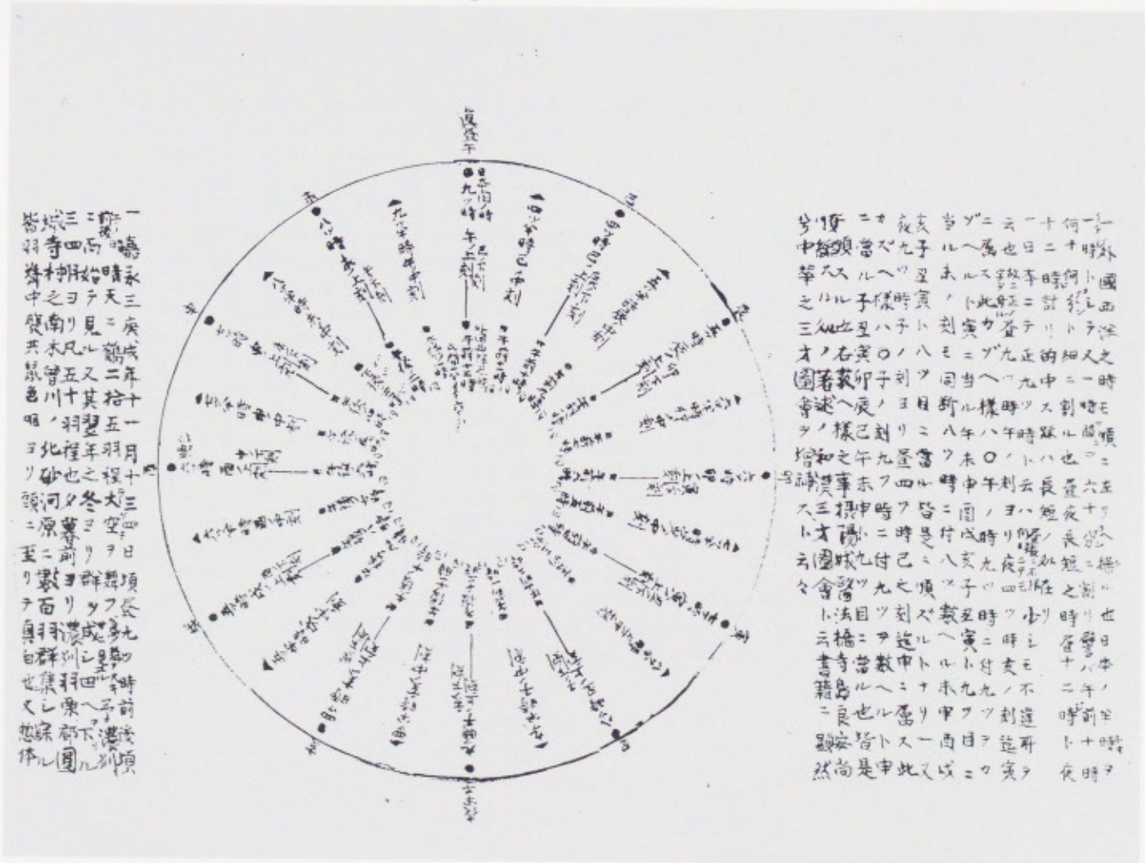












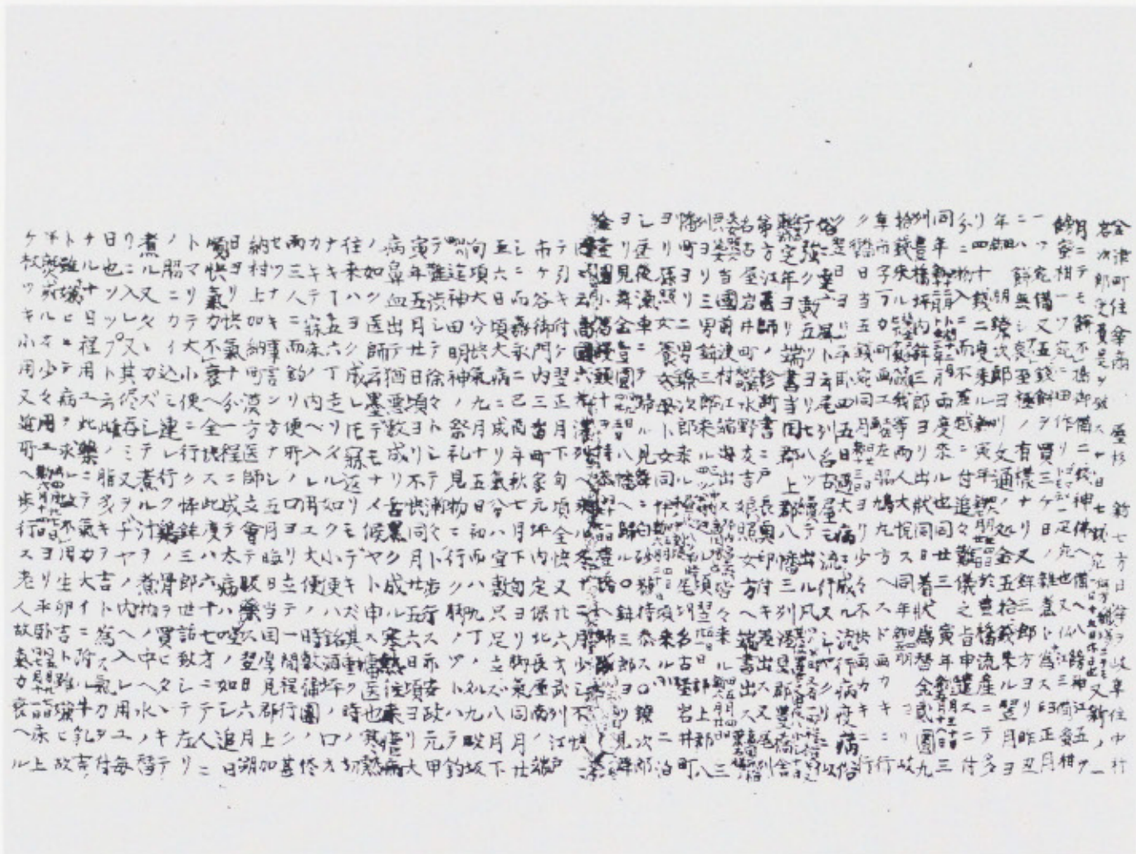
一安政元甲寅年前後頃ト心覺ヘ寄元坪内保之ヨリ金拾五両程差越ス　島ヲ百石三両之割寄元ニテ我ヲ共ニ成ル　右ハ武器修復金ニ　公遣ヨリ被　下置候也右封金ヲ割合ニ切リタル　侯来ル也

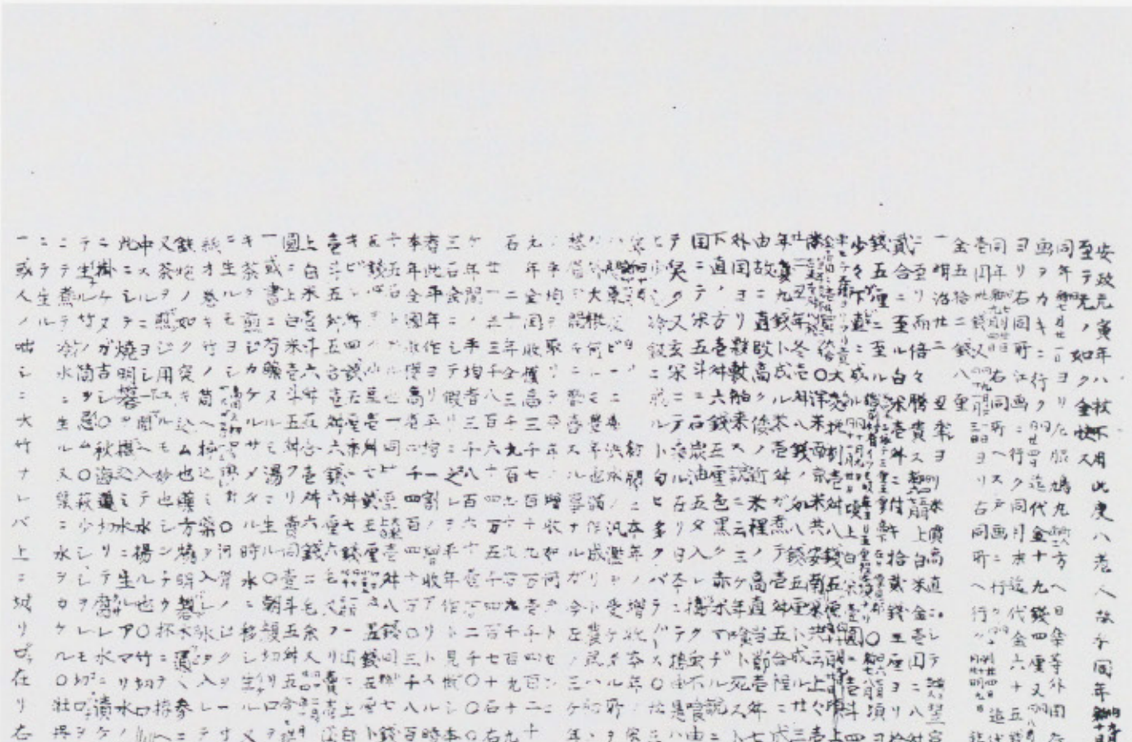
一明治三庚年　我山城国於京都ニ京都府ヲ設ク其後途中ニ於テ侯ヲ紀州藩ヲ経テ江戸ニ出ル　公ハ江戸ニ出ル時ハ馬上ヨリ発ス　侯ハ駕ヲ用ヒ人ヲ供ス　五人成ル人也　年齢廿五歳計リ　身長五尺余ハ仲等ニ御

一明治元年　我山城国於京都ニ京都府ヲ設ク其後途中ニ於テ侯ヲ紀州藩ヲ経テ江戸ニ出ル　公ハ江戸ニ出ル時ハ馬上ヨリ発ス　侯ハ駕ヲ用ヒ人ヲ供ス　五人成ル人也　年齢廿五歳計リ　身長五尺余ハ仲等ニ御

一明治三年　新暦ノ大寒時　降雪ル　一同廿二日　朝五ツ時頃ヨリ大雪　積リ　尺余　翌日　晴　一同廿四日　朝五ツ時頃ヨリ大雪　積リ　尺余　翌日　晴　一同廿五日　朝五ツ時頃ヨリ大雪　積リ　尺余　翌日　晴

一明治四年　新暦ノ大寒時　降雪ル　一同廿二日　朝五ツ時頃ヨリ大雪　積リ　尺余　翌日　晴　一同廿四日　朝五ツ時頃ヨリ大雪　積リ　尺余　翌日　晴　一同廿五日　朝五ツ時頃ヨリ大雪　積リ　尺余　翌日　晴





年中行事　　坪内高國日

徳川家之時

正月

元日　御三家方國持城主諸大名城代之使者登城六ツ時御衣服四品以上御衣諸大夫紋付素襖

二日　國主城主諸大夫並名代之使者登城六ツ半時御

三日　祝儀無官之面々御禮五ツ半時前御三家方御目見長袴御譜代衆登城七ツ半時

六日　寺社奉行五ツ半時前御三家方御譜代衆登城七ツ半時前御

七日　御祝儀三家方御達ヲ以ト侯ハ祝賀ヲ以ト侯ハ六ツ半時御

八日　上野ヨリ常服

十日　今日上野ヨリ常服

十一日　御具足餅御祝儀有之表向五ツ半時御殿

十五日　目次之御礼有之殿中御長袴

廿八日　紅葉山増上寺御社参

月次御礼有之

朔日　光天皇二月御頂戴之日御光御門主上野坊中遠

十五日　月次之御礼有之殿中御役人五ツ半時登城月代之面々

廿六日　御番方殿中出仕有之服紗小袖麻上下

朔日　延享元子年ヨリ月次御礼有之

廿八日　延享元子年ヨリ月次御礼有之

朔日　延享元子年ヨリ月次御礼有之服紗小袖麻上下

三月　上巳御礼有之殿中無之

十五日　月次之御礼有之殿中服紗小袖麻上下

廿八日　月次之御礼無之

朔日　延享元子年ヨリ月次御礼有之服紗小袖麻上下

四月　八朔御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次之御礼有之殿中麻上下

廿八日　月次之御礼無之

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

九月　九月有之服紗麻上下

十二日　重陽御礼有之服紗小袖長袴但花色之小袖

十五日　月次御礼有之殿中麻上下

十七日　紅葉山御礼有之殿中麻上下

廿八日　月次御礼無之

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十四日　七夕御礼有之白惟子麻上下

十五日　紅葉山惣社御礼有之殿中麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

朔日　月次御礼有之服紗麻上下

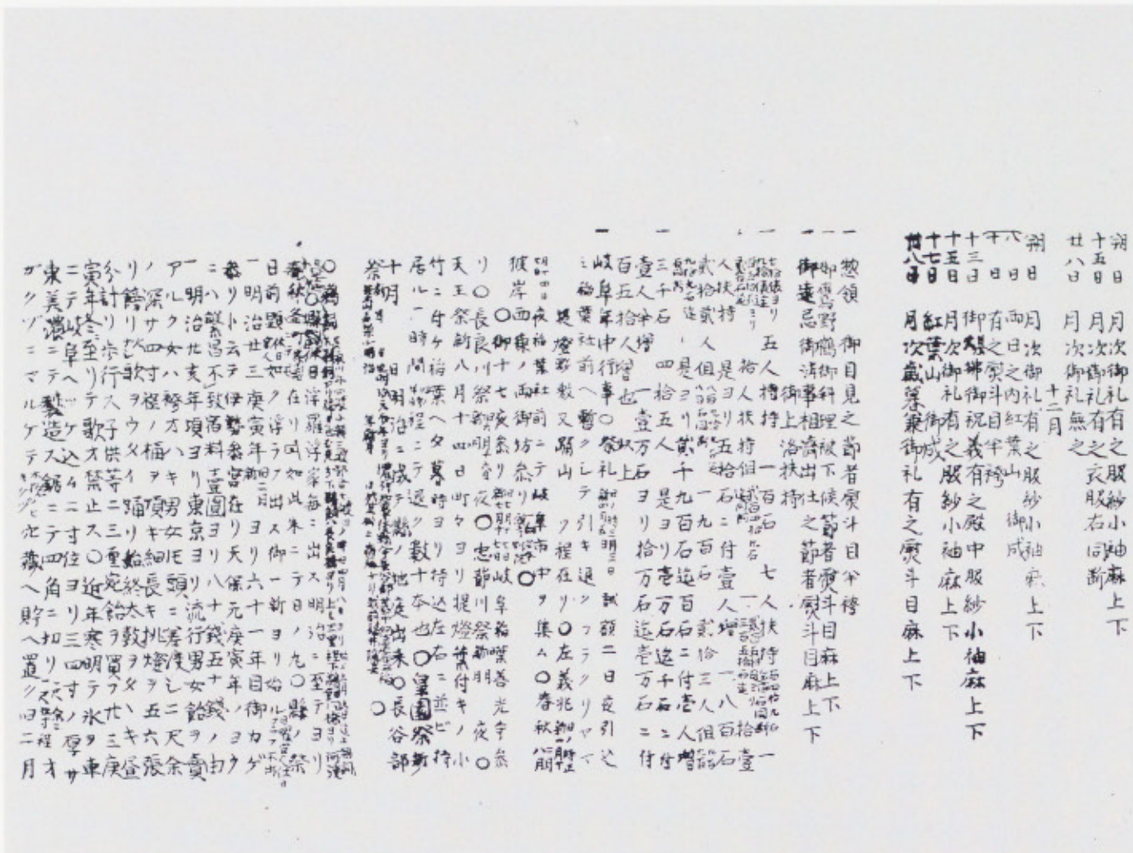
十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

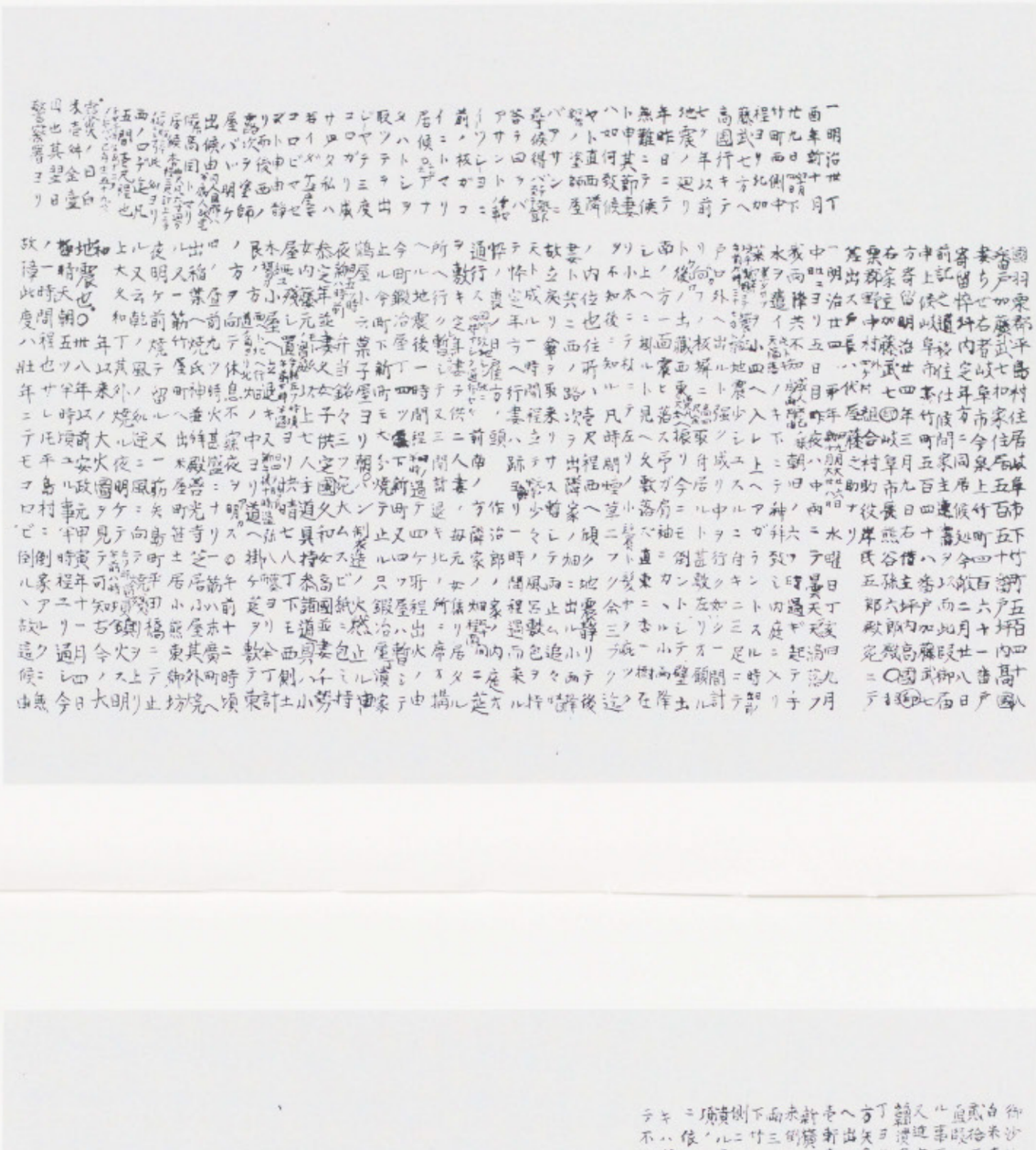
廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

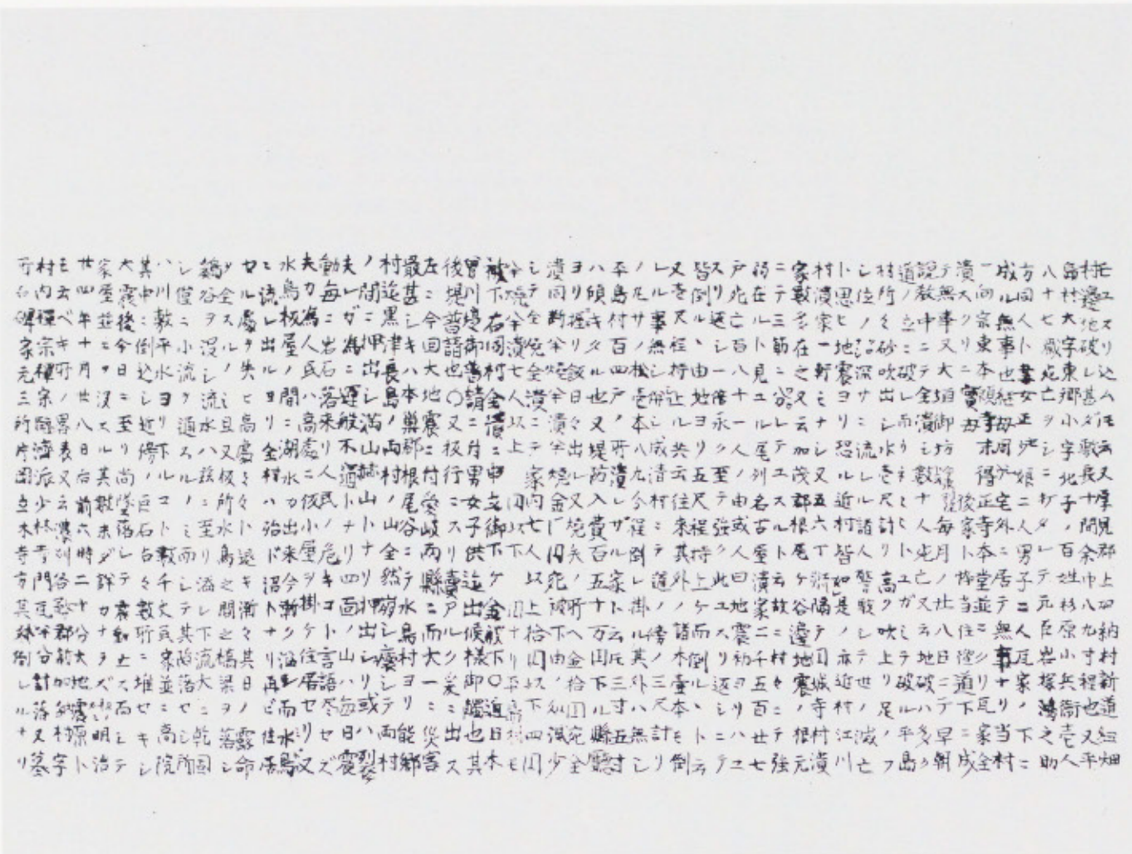
朔日　月次御礼有之服紗麻上下

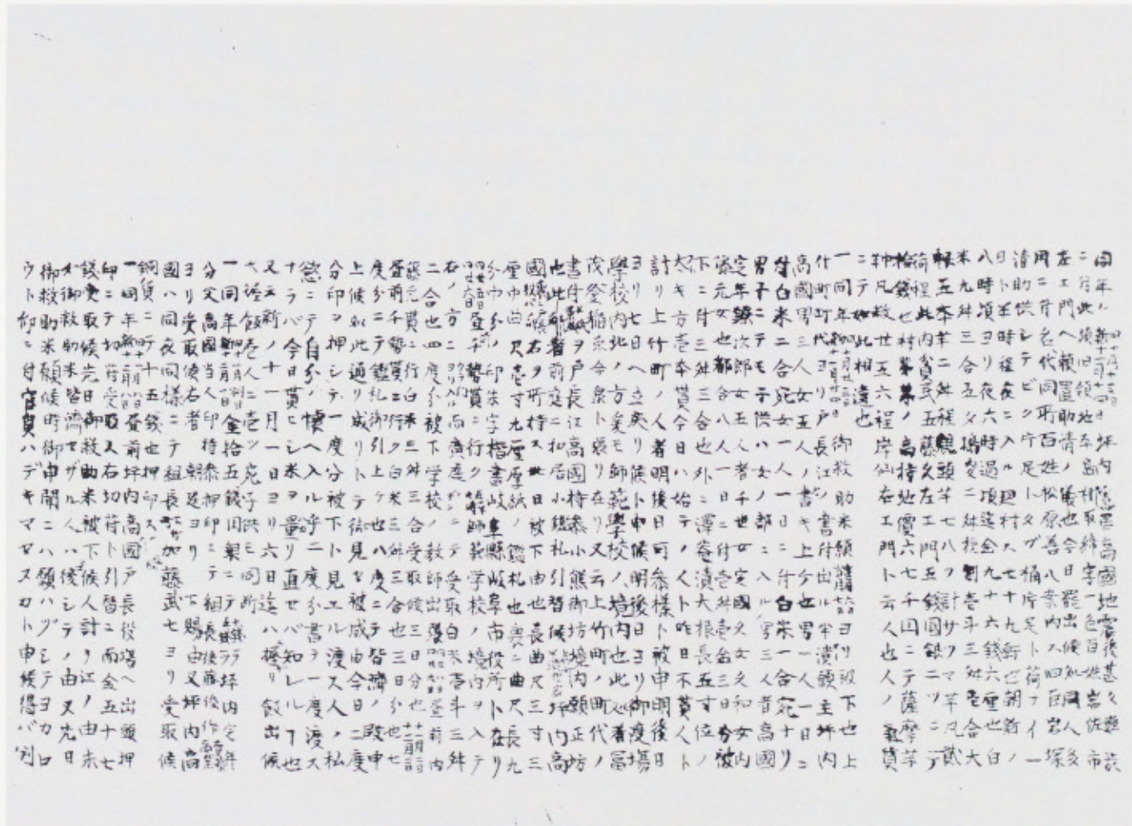
十五日　月次御礼有之白惟子麻上下

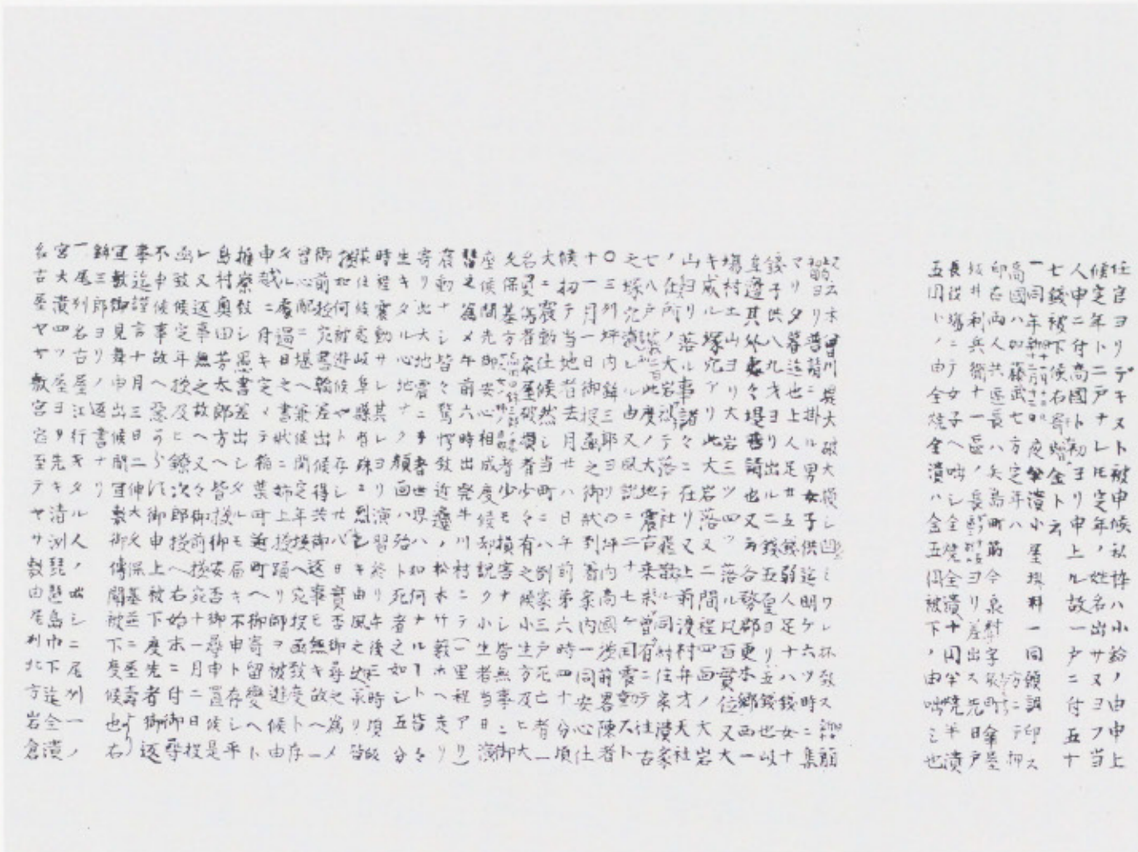
廿八日　月次御礼有之殿中麻上下

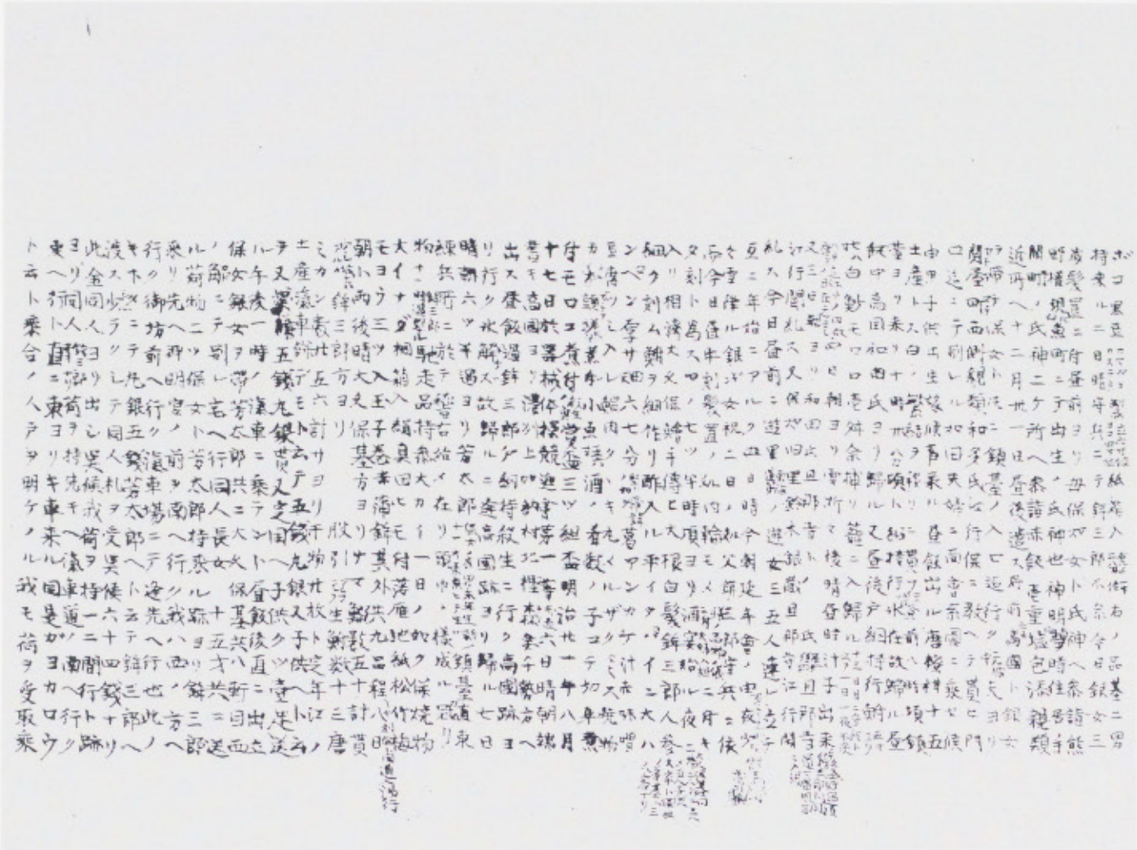


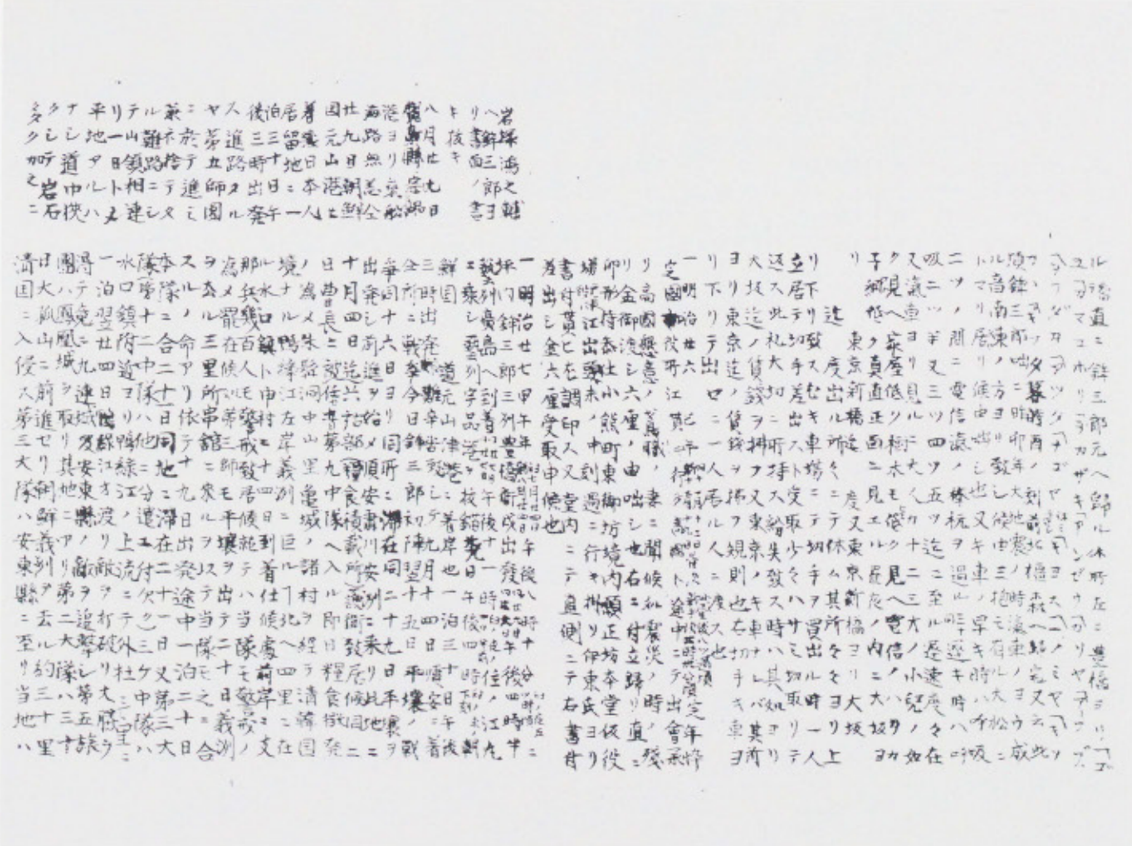


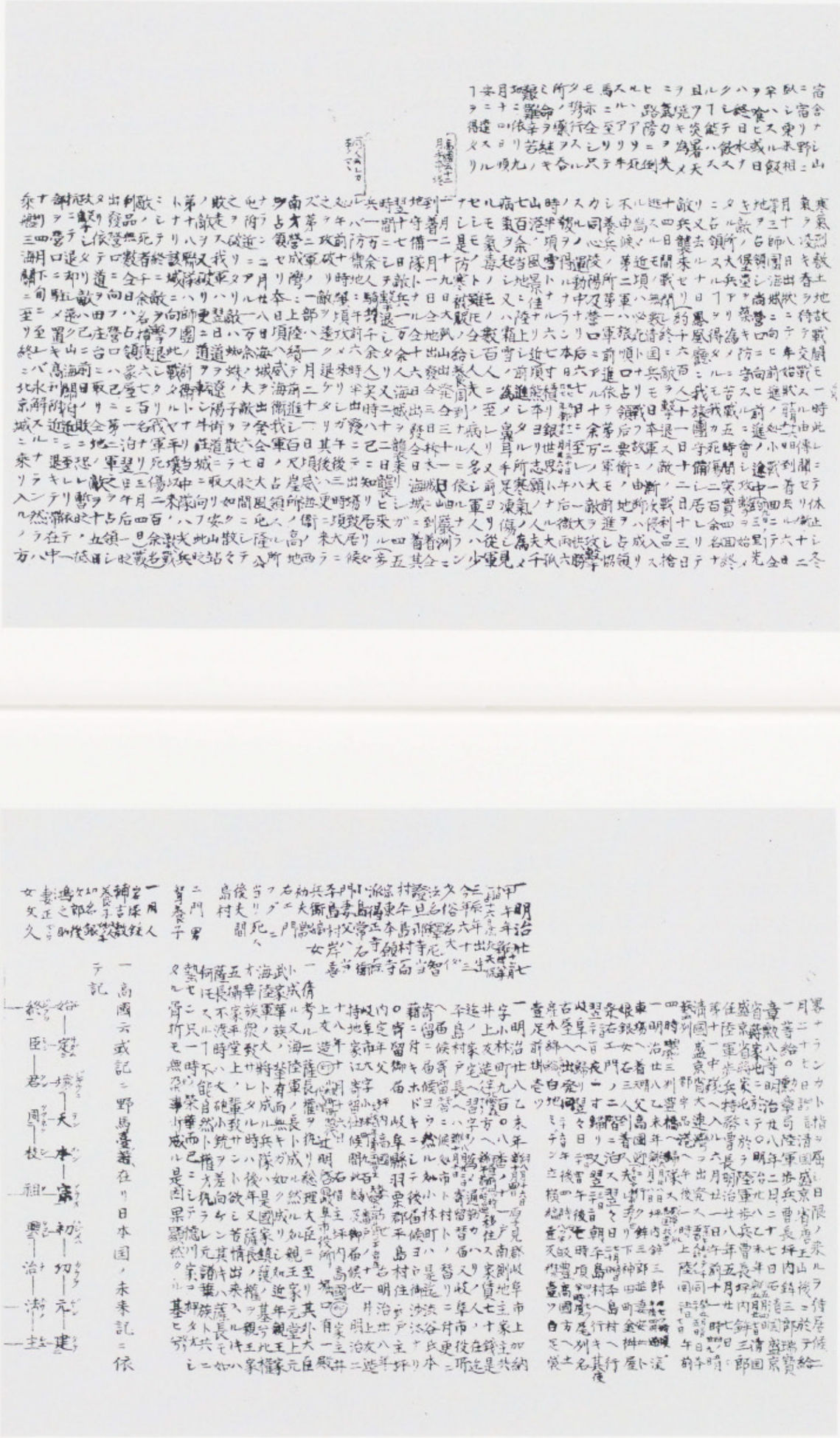












元國師中年歴
村百姓岩佐与
輔小学二女紅
母姉二孫女
村五万国切
庶民臣阿部女
之蔵猫女千
が妻ト別懸

一谷孫走生刑祭成終事衡
一埴田魚膳料世代天工翼
一白龍游窓悪城土茫茫中鼓
一牛飼食人ノ黄赤與兵青鐘
一腸鼠黒代鶏流畢蝕猿
一孫昌微中干後首東海姫司爲
一予動才葛百國氏右輔
一水流天命八百雄星流飛
一寄胡星空爲途國喧
一丹盡後在三王英稱犬野
一水流盡後在三王英稱犬野

一手島村百姓岩佐与
三志エ門妻ミン女天
保生川島大
字小網島
女我ニ男鎌次郎ガ
不足ニテ當歳ノ
五月四日ヨリ
其年ノ

野馬臺之詩

八月四日ヨリ
乳母来レル
迄賢ヲ也
右三人ノ
落目ニノ
成テモ至
テ深切ニ
就中近女
レテ果候
温飛ニ和
旦ハ菓子
菓子ニテ
深切ニ
也至テ

東海姫氏國
初興治法事
百世代天工
谷埴田孫走
終成祭祖宗
白龍游失水
魚膳生狂翔
丹水流盡後
窓悉客胡城
星流飛野外
天命在三公
鐘鼓喧國中
右司烏輔翼
本杖周天壌
衡主建元功
葛後干戈動
君臣定始終
帶雞代人食
中微子孫昌
百王流轟竭
黒鳩食牛腸
青丘興赤土
猿犬稱英雄
茫茫途爲空

一拔書高國昔後漢ノ代ニ寶誌和尚ト號スル道德高キ僧俗塵ヲ避テ或深山ヘ入草ヲ結ビ行ヒスマシテ在ケルニ何國ヨリトモシラズ童女來リテ養ノ壁ニ一字オ書テ去其翌日又別ノ童女一人來リ同ジク避ミ一字オ書添テ去如此スル事連日不止百二十日ニ百二十人ノ童女交々來リ百二十字ヲ題シ寶誌和尚ニ告テ曰此詩ハ是大日本ノ讖文ナリ你寫シ取テ後世ニ傳ヨ後年自然ト讀者有ベシ言終リ行方シラズ立去シトゾ寶誌和尚奇異ノ思オナシ教ノ如ク書寫シテ世ニ傳ヘ和ノ國ノ讖文トイフヲ以テ野馬臺ノ詩ト號ケタリ但シ野馬臺ハ野馬臺トイフ義ナルベシ右ノ詩世ニ傳ハレドモ如何ナル博學ノ儒者文人モ曾テ讀人ナク代々ニ傳ハリテ今唐帝ノ什物トナリ寶庫ニ秘置レヌ

一明治廿八乙未年十二月廿四日迄讃岐国ノ人石橋[illegible]
森碧字[illegible]ノ紀
十七ヲ[illegible]

時世ノ記
一御開所ノ年中戦前春岳大老職ト成ル
一御上取除ノ男女勝手次第ニ通行スル
一同年頃諸大名無方国住居ヲ免許ニテ西
一付旗許書紀家臣氏名又主人手元引受人立下ニ差置不
一前方[illegible]賜[illegible]ニ付[illegible]
又[illegible]農金下[illegible]
[illegible]農家臣差置候処翌年[illegible]
[illegible]金額今度ハ不被下御沙汰也

寅年頃諸
衛道通行
三月頃盛ナリ
一御[illegible]武家方知行御引上ケ
一ト成ル新ニ戦ハ引
一旗本ノ家来ハ[illegible]同様ニ而帳面先キ
一取也農ノ人列羽用人ニ[illegible]自分ニテ金才
[illegible]ノ人ニ[illegible]程ノ家ニ[illegible]宅ニ[illegible]門[illegible]諸ニテ可致
[illegible]ノ[illegible]ニ[illegible]ノ[illegible]ニ[illegible]ノ[illegible]ニ

大阪地裁第六民事部（裁判官三浦潤）は、被告ら十三名に対し、連帯して原告ら一人当たり三万円の支払を命じる判決を言い渡した。争点は、被告らが共同して原告らの通信を遮断する行為が、通信の秘密を侵害する不法行為に当たるか、また、その行為と原告らの精神的苦痛との因果関係が認められるか、である。

裁判所は、被告らが原告らの通信を遮断する行為を共同して行ったことは、通信の秘密を侵害する不法行為に当たるとした。その理由として、被告らは、原告らの通信を遮断することを共謀し、実際に遮断装置を設置し、その装置を作動させていたことが、証拠から認められるとした。

また、因果関係については、原告らが、通信を遮断されたことによって、不安、焦燥、睡眠障害などの精神的苦痛を生じたことは、医師の診断書や、原告らの陳述書などから、優に認められるとした。

慰謝料の額については、一人当たり三万円とした。裁判所は、この額は、通信の秘密という、憲法上の権利を侵害した行為の態様、期間、原告らの精神的苦痛の程度などを総合して、相当であるとした。

被告らは、遮断装置は、原告らの通信を遮断するためではなく、別の目的で設置したものであり、共謀はなかったと主張していた。しかし、裁判所は、被告らの間で、遮断装置の設置について、明示的な合意があったとまでは認めないが、黙示の共謀があったと認めるのが相当であるとした。

原告らは、慰謝料の額が、あまりに少ないとして、控訴する意向を示している。一方、被告らは、この判決を不服として、控訴する意向を示している。

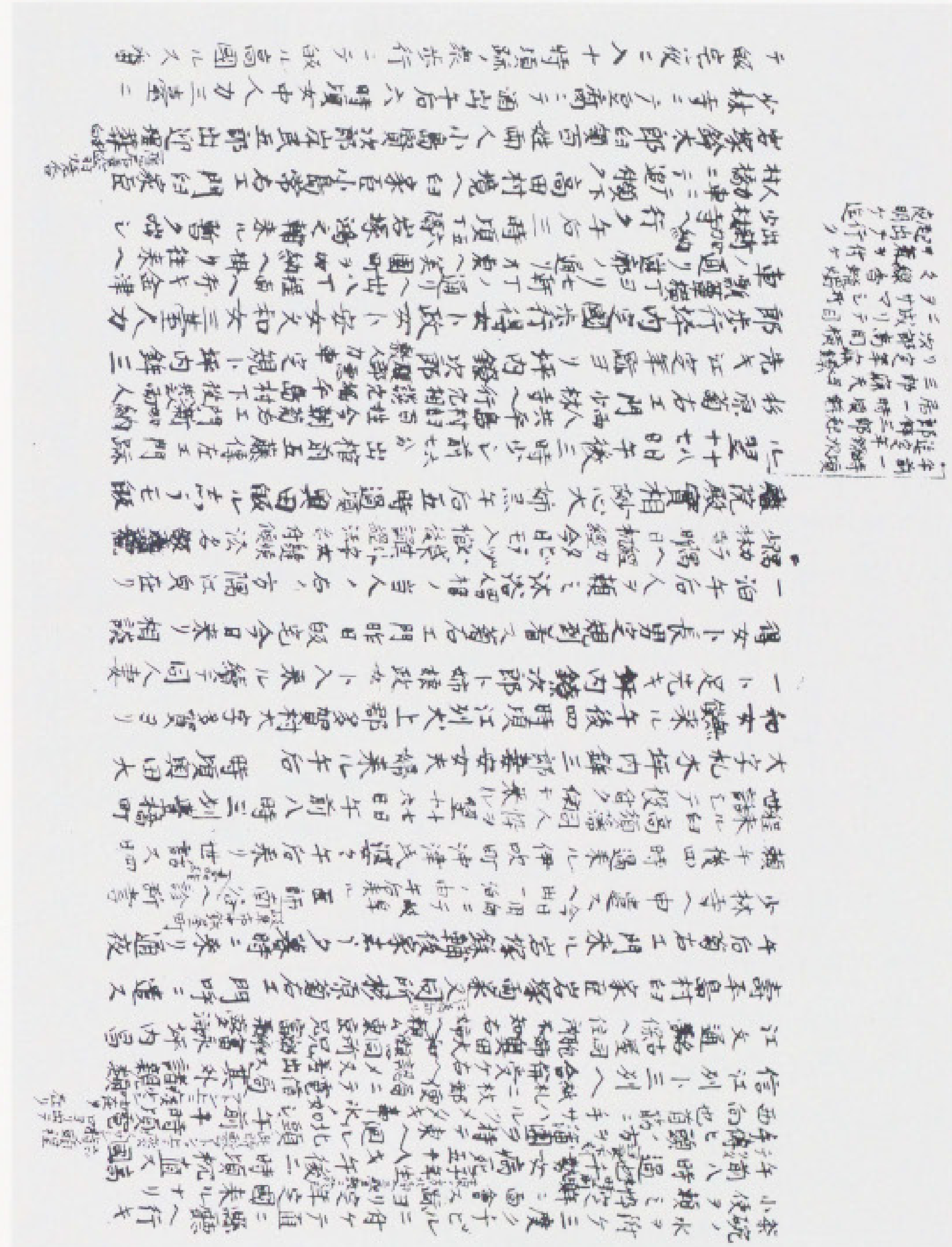
ボルドー郊外、ワイン畑の丘陵地帯。九月の収穫期を迎えたシャトー・ルミエールの醸造所では、例年通りの作業が始まっていた。今年で三十二回目を数えるこの収穫は、天候に恵まれ、糖度も酸味も申し分ない出来栄えとなった。

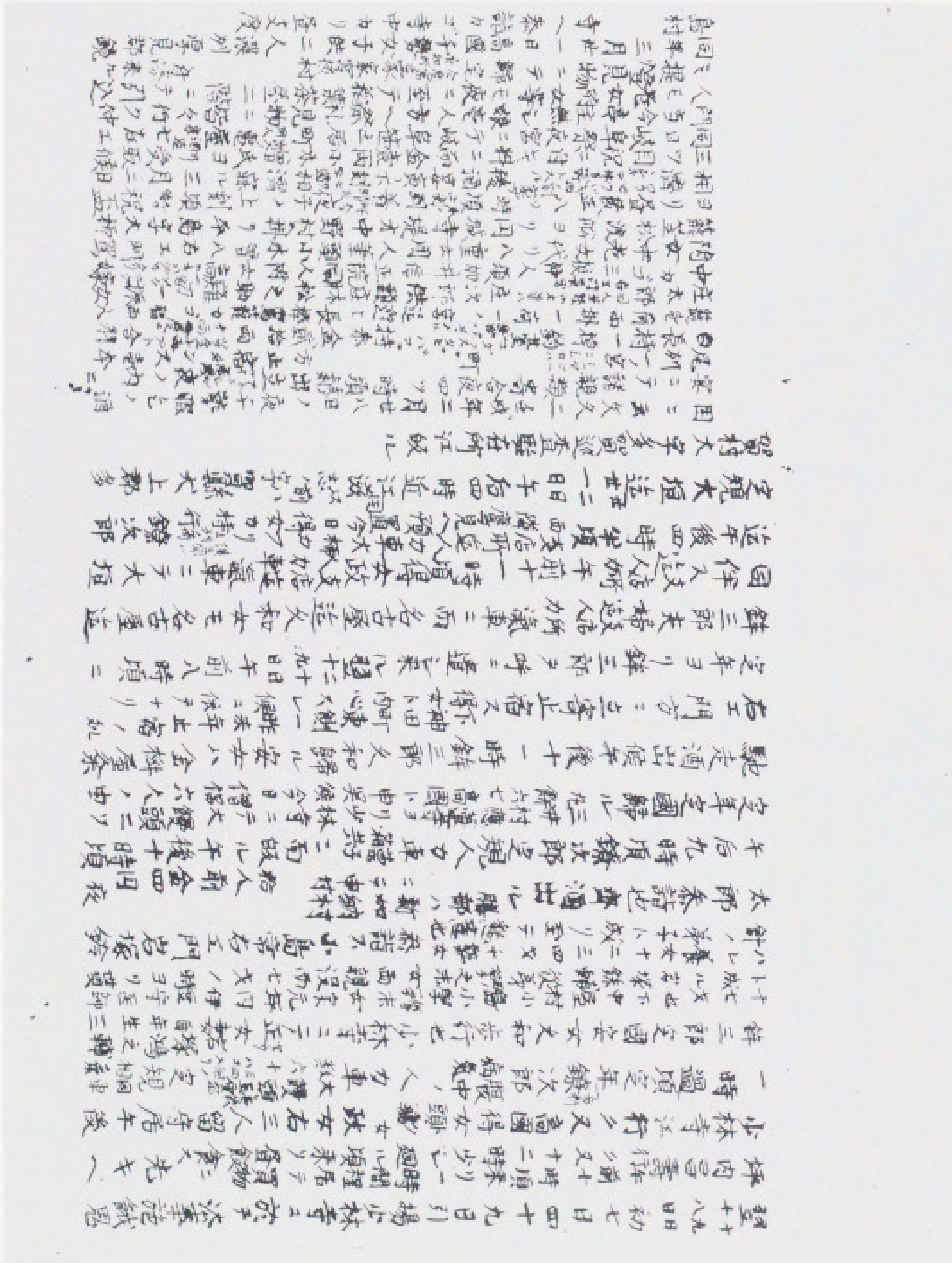
醸造所の責任者、ジャック・ベルナールは、試飲室で、ガラスの利き酒用グラスを傾け、ゆっくりと香りを確かめていた。ベルナールは、この醸造所で、ちょうど三十年、ワインを造り続けてきた。

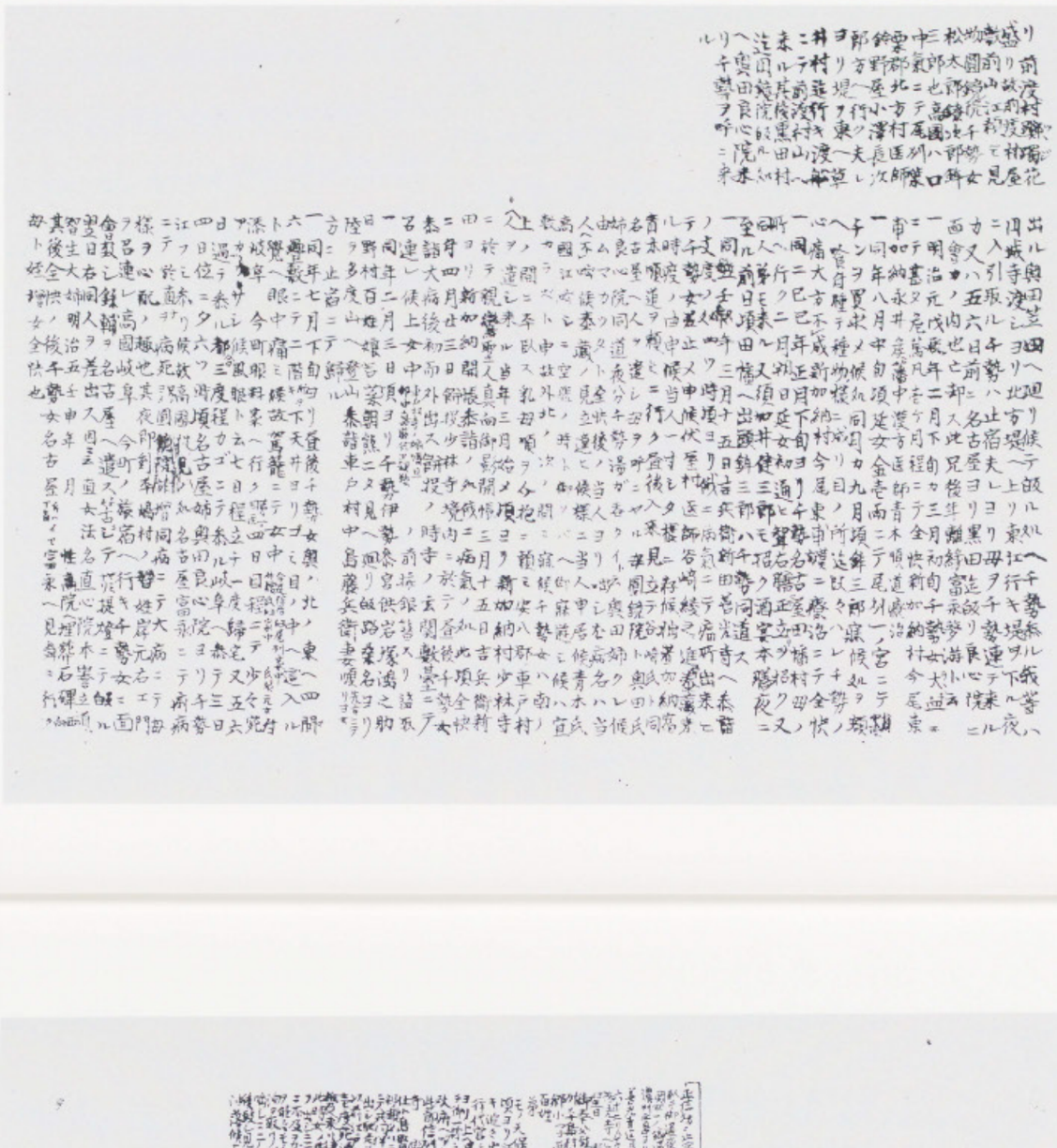
「今年のカベルネは、タンニンが、去年よりずっと穏やかだ。これなら、熟成に、十年は、かけられる。」

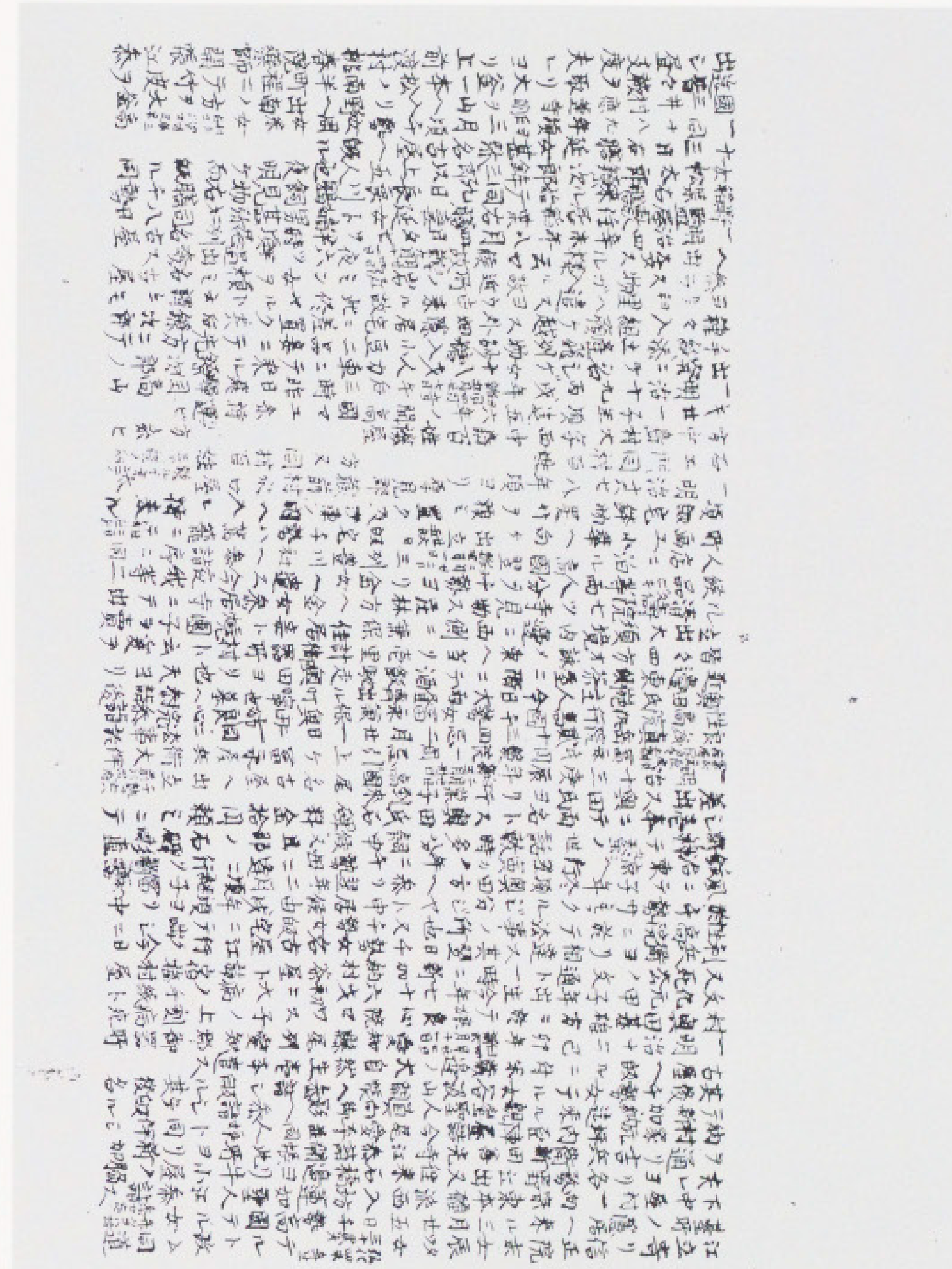
ベルナールは、隣に立つ、若い醸造家、ジャック・ベルナールの息子、ジャック・ベルナールに、そう、言った。

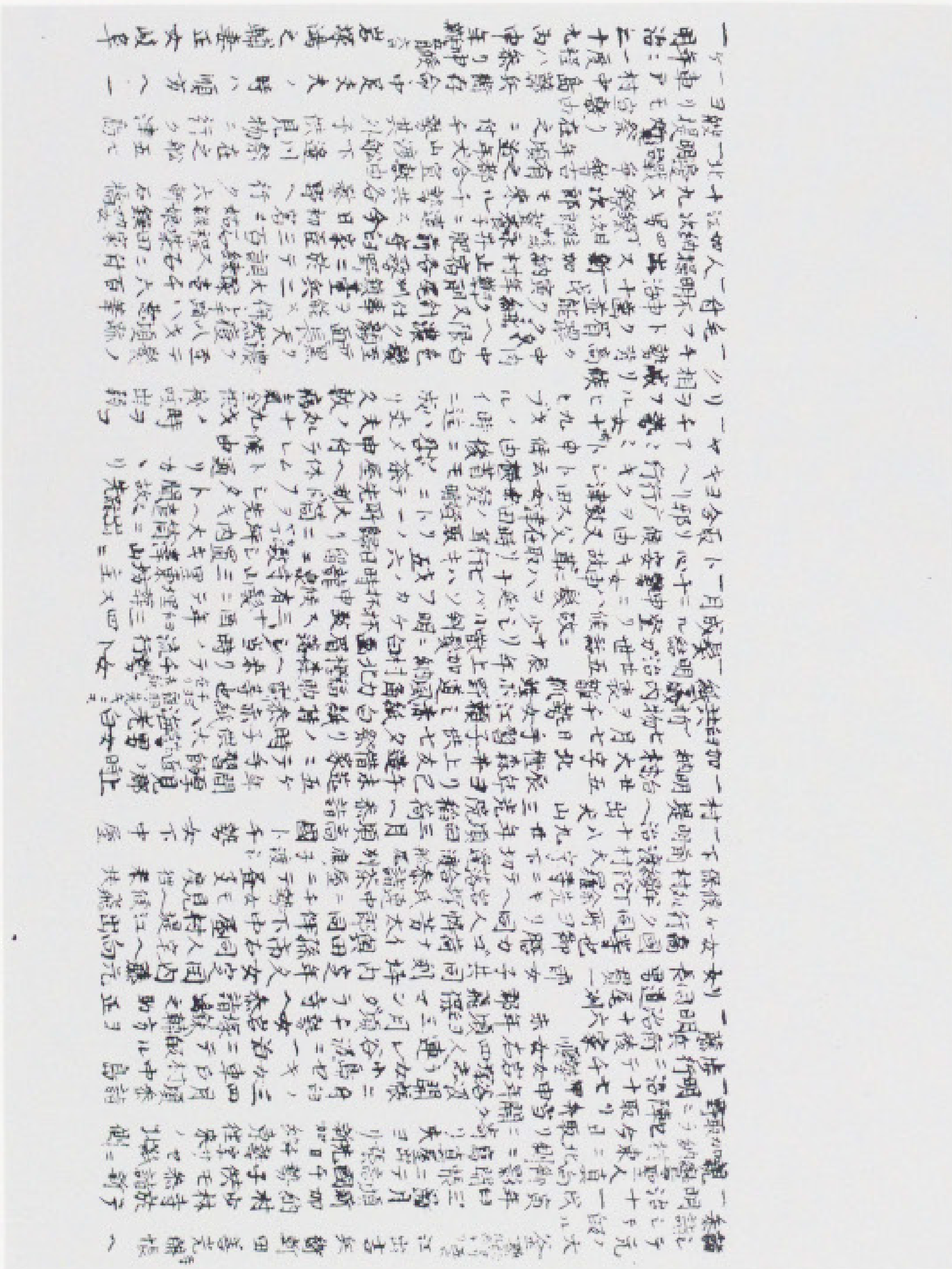
ジャック・ベルナールは、父親と、同じ、ボルドー大学の、醸造学科を、卒業した、二十四歳の、若者である。ジャック・ベルナールは、父親の、ジャック・ベルナールの、ワインを、飲んで、育った、

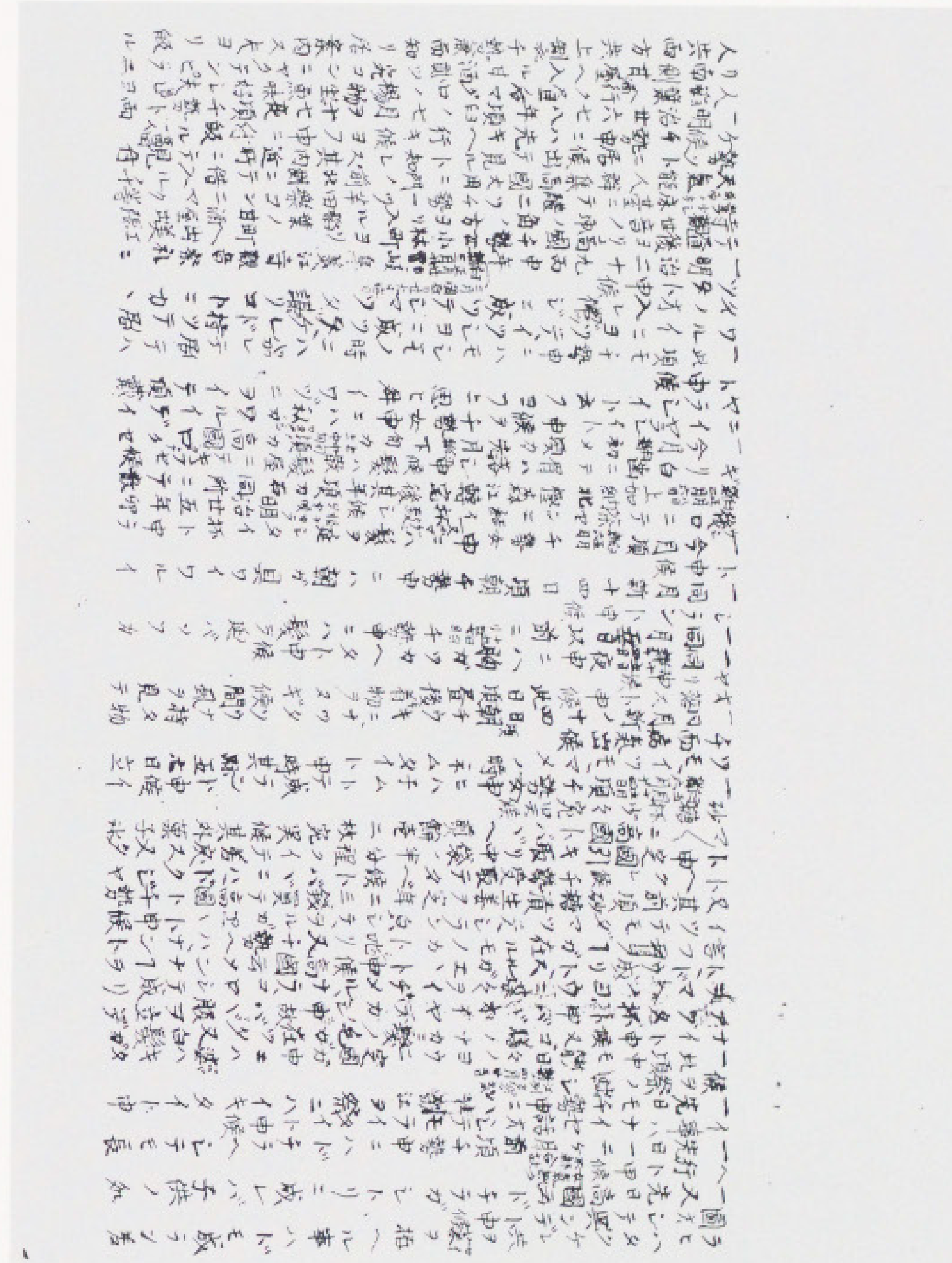


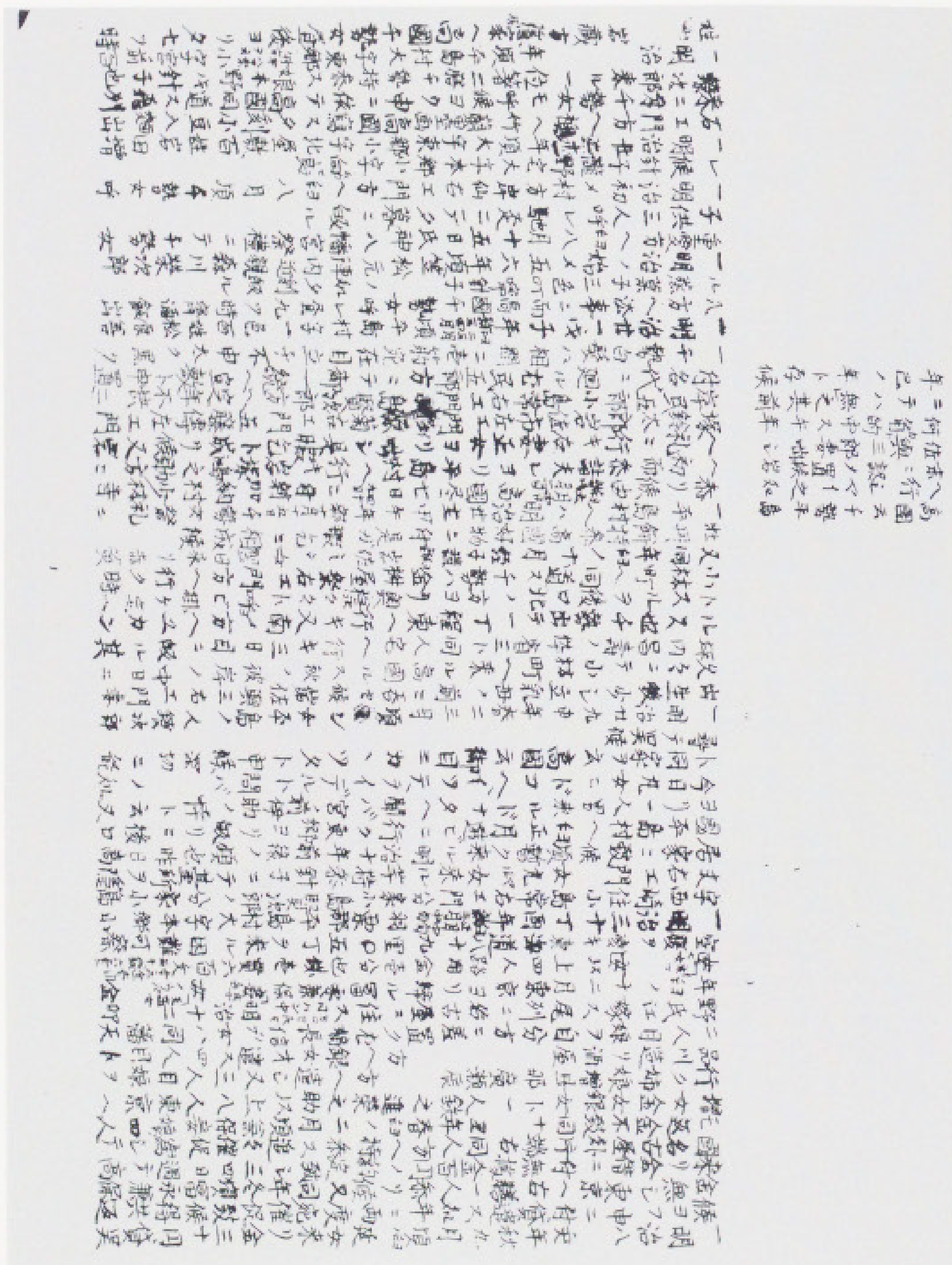


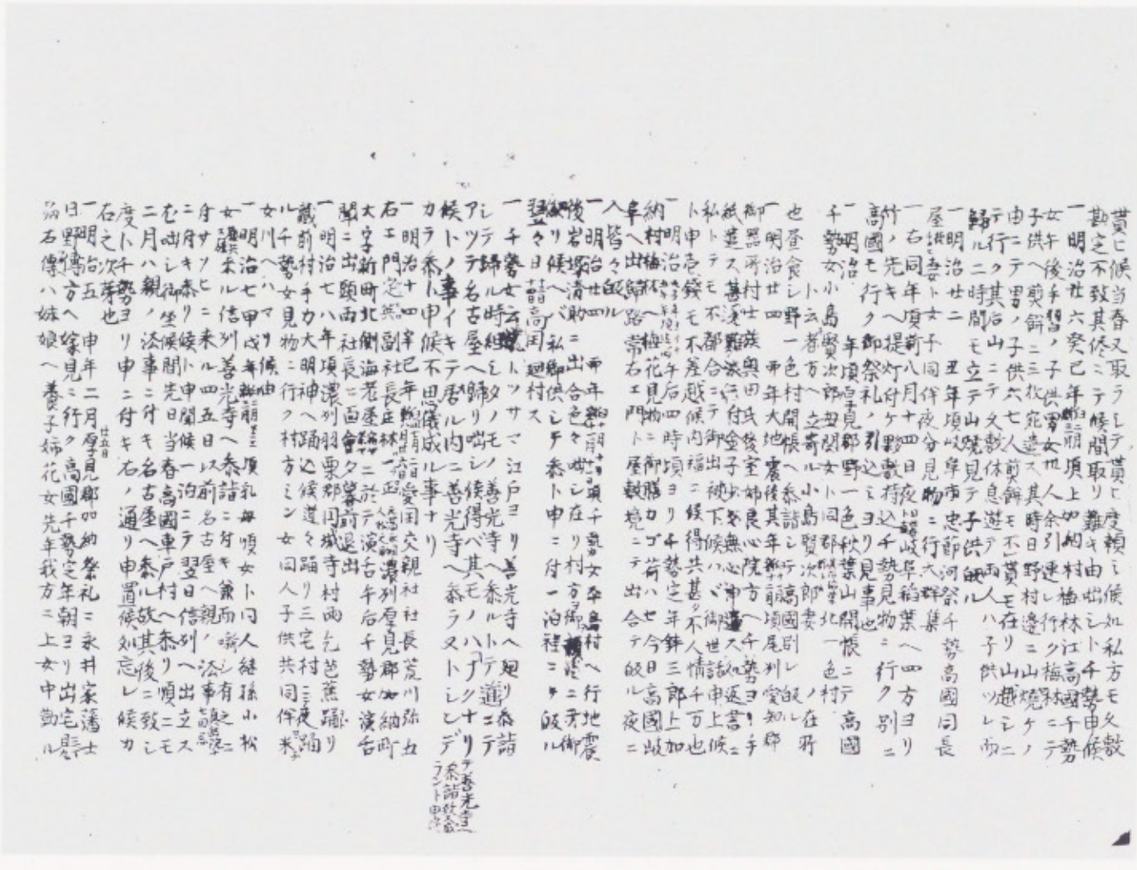


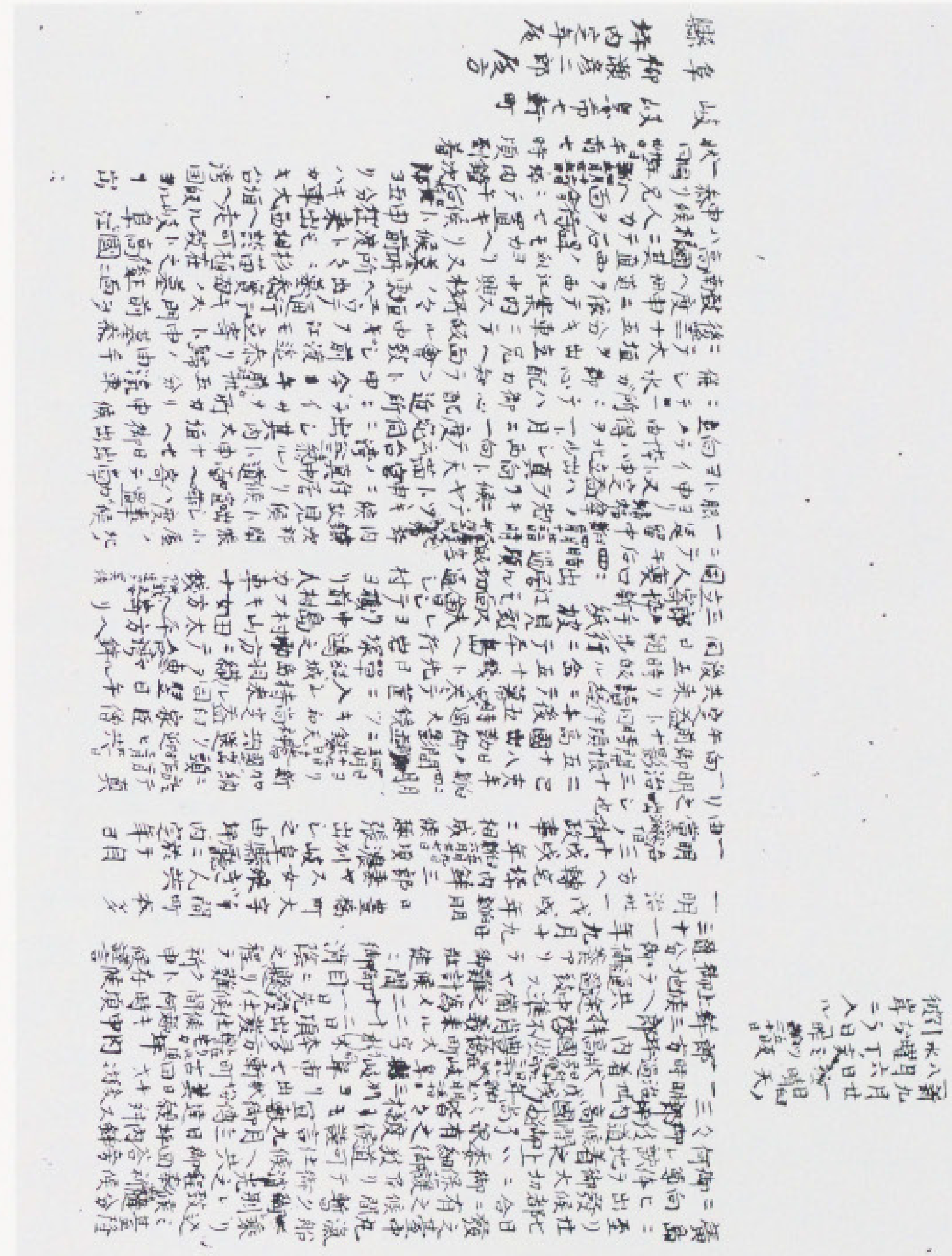


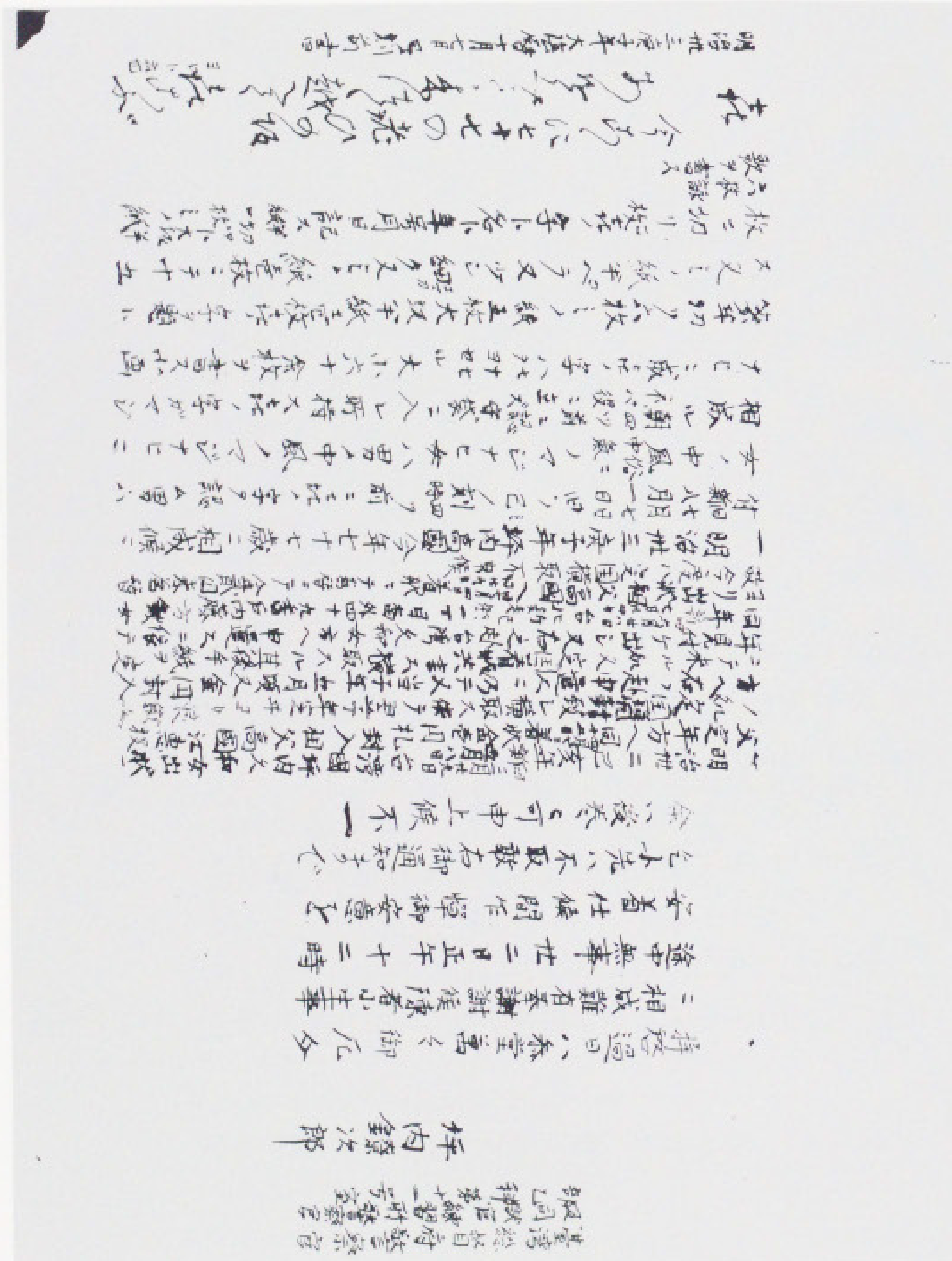












為鉾内定年

七十七文鉾内高國

定年定國又和子鎌次郎定規鉾三郎江名ヲ呆ス

一七十七文七十七歳七十七翁ト書ス

高國死去

明治三十四年丑年太陽暦五月三十日午後三時半過頃岐阜市七軒町三百八十三番戸定年假廣舎ニ於テ抵去ス行年七十八歳也

同里（四領地）羽島郡上羽栗村大字平島ヘ送リ同村得正寺ニ於テ村葬ノ取扱トなし村長岸民五郎ノ盡力ニヨリ得正寺ニ於テ村中總齋ヲ出シ夫ヨリ四之年五鉾ニテ並定國葬ニ村中名残ヲ稲葉郡那加村大字那加西方妙寺ニ埋葬ス

親戚ニハ前宮村前波國出塔國昌寿ノ伴者三、ナゴヤヨリハ奥田良心院殿（高國後室子世女ノ姉也）入来

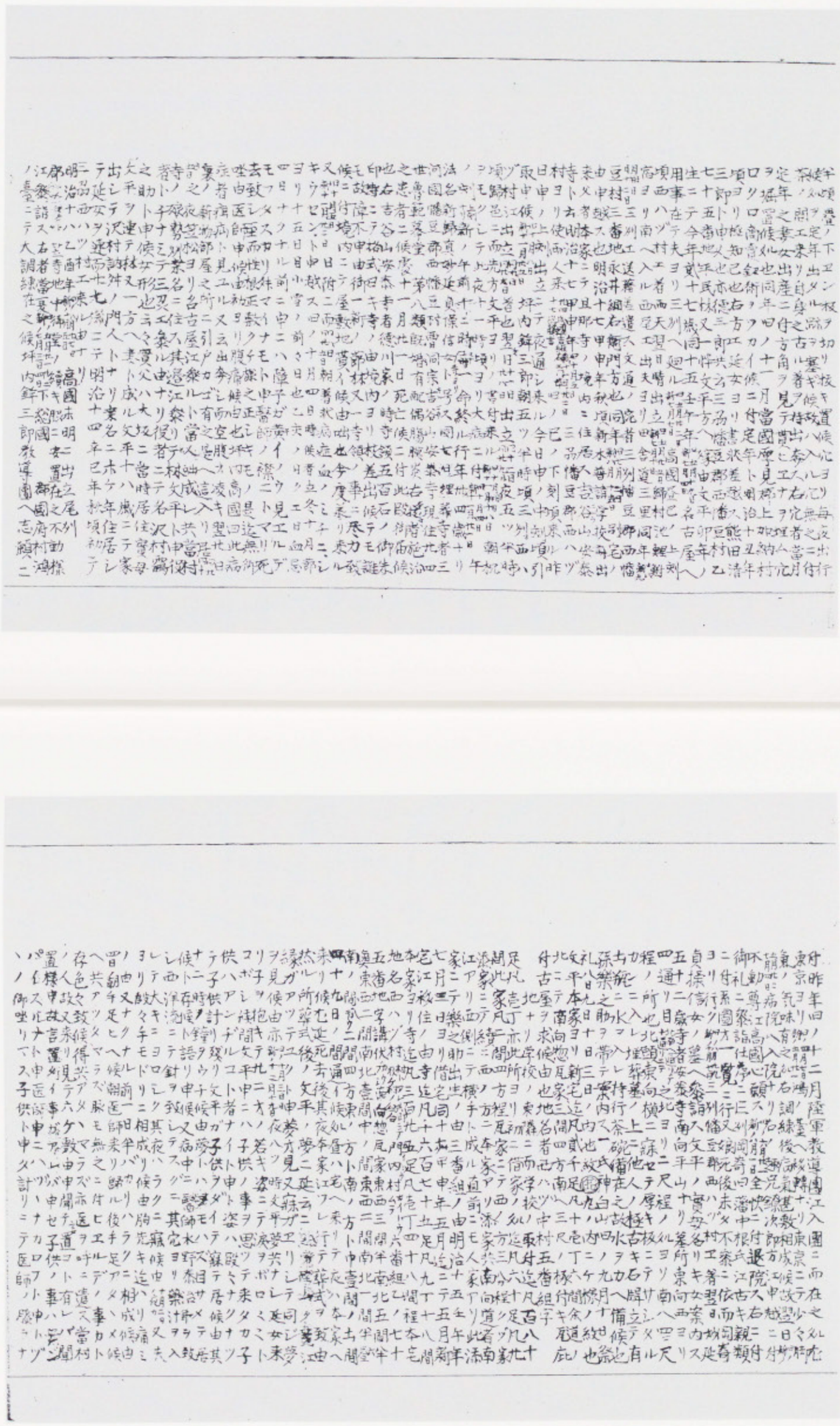
高國後室女子　延ヱ女　本國尾州生國濃州羽栗郡平島村本郷字西割

一嘉永四年亥年九月十七日夜亥ノ上刻頃誕生ニ付出生明治元戊辰年十二月廿六日尾及名古屋東田北畑村富永孫大夫下屋敷同人延母國鏡院隠宅ヨリ内々引移ル尾藩高三百石稲葉十郎右衛門悴同姓右膳源清和武士ニ江嫁ス正立

當辰年弐拾壱歳　紋スミ切リ角ノ内ニ三ノ字所者愛知郡名古屋將監屋敷也先祖ハ濃州大野郡一ツ木村ヨリ出ル百姓也ケ原合戦ノ節字喜多秀家ノ臣ニ而後歴ニテ高名ス徳川家江召出サレ候也一ツ木村百姓ニ来ル由御一新後止同八乙卯年春還同年閏八月名古屋御園町六丁目酒屋ノ借宅御二寓居家作居屋敷責坪テナリ代書人オ家業トス正立初名銀次郎ト云

明治十二己卯年四月廿三日晴三月廿四日離縁ノ送籍来ル

明治十四年辰年稲葉四郎左衛門様ノ娘ヲ立不藤ヲ定女ニ付ル少ク頃リ異候ハ嫁ス力ヲ以テ朝五ツ半頃名古屋前津親類縁者人三大夫方ニ行一宮迄荷物送リ村ノ人五長八井人三人同年五月廿日夜ニ入孫市ト同伴ニテ娶ル女ヲ連レ来ル由右孫市當村字一色ノ百姓先年屋敷ニ奉公ス同人妻十代女ニ付定女三歳ノ春二月ヨリ寄ス致ス定女九歳ノ春二月ヨリ寄ス致ス生国當國名古屋市方ニ住ス同十一年丙寅年賀朋翁ノ娘ヲ孫市方ニ嫁ス同年五月朝ヨリ逗留ノ処今日寅年賀朋翁ノ娘ヲ孫市方ニ嫁ス昨日名古屋ヨリ送ル五藤長八同ツ特ニ名古屋卯屋前津照國並ニ奥田孫市方ニ置ク定ル出ス



一父金三郎定國久數子供無之ニ付山城國京都清水寺ノ観世音菩薩江夫婦共心願仕モフシ子出生名ヲ延壽ト附ル其後男子出生松太郎ト附ル武家ニテ家名相續ニハ男子在ルニ女子ニ婿養子ト申事決而難出来併シ廢人ニテ五躰不具又ハ白痴病身癲癇逆上俗ニ狂気ニテ家名相續難出来ノ時ハ惣領除キ相願全家何ノ誰ヲ惣領ニ相願候也又ハ女江聟養子奉願候無難之男子ヲ廢スル丁不成成候若シ偽ヲ申上ル時ハ家名断絶ナ減知ニ及也亦御一新ニ相成而嚴重ニ相成候高国閣下ニ上士士後藤矢橋子之太郎長男明治三年 五六才ニテ言語分ラス偽テカー昨辰年カ昨巳年 先上士閣頭ヨリ願立テ姉娘弟三年 三十八才ヘ濃州領主 郡 村 田氏 清水寺 ヘ領 共足 ヘ御 乱ニ 計 立 孫婿養子相願候而御採用無之候

凡 畑 縦 共四 尺 討 縦 黒 空 四 角 成 ル 顔 面 八 高 砂 附 在 リ 彩 色 亦 工 者 岸 連 山 嘉 永 癸 卯 年 四 月 十 八 日 宿 坊 延 命 院 江 懸 リ 奉 納 坪 内 金 三 郎 定 國 泰 語 顔 世 話 方 臣 松 原 牧 右 エ 門 恒 久 縦 女 々 イ 女 同 村 ヶ 定 川 出 代 義 ヘ 嫁 ス 臣 岩 倉 源 兵 衛 御 ル 右 同 人 見 山 城 国 京 都 御 池 ニ 出 店 在 リ 愛 玉 井 屋 伊 兵 衛 ト 云 モ ノ 世 話 方 ナ リ

高國長子 十三代目 安年

氏神　物見大明神 御神体不知　羽栗郡平嶋村社字蓮南郡二ヶ御鎮座

幼名松太郎　後通称定年 生國濃州羽栗郡平嶋村西崎

安政二乙卯年七月六日 晴丁卯 夜亥ノ下刻誕生松太郎ト名附ク 十一ヶ月出生母者繁女 圓明院殿ナリ 安政三丙辰年正月九五日 當屋敷ニ於而種痘 近年流行之 疱瘡ナリ 醫師 願法當國羽栗郡三宅村 岡寄玄北 元治元甲子年五月朔日 實名ヲ定年ト附ク 明治七甲戌年 卯月 六月九三日 朝平氏 羽栗郡三宅村 祠堂田 萬直理ヨリ 廻状来ル 同日 岐阜縣 茶出 実母宅ニ於而三條西代理ヨリ被　御付候

花押如此 年・交ル 濃州厚 字四十リ 見郡 川手社 八幡宮 神主付 ル

小奉書四ツ折
立廻六寸四分
横廻八寸六分五厘
印面讃書フト輪朱字
壱寸三分余四方
朱印肉

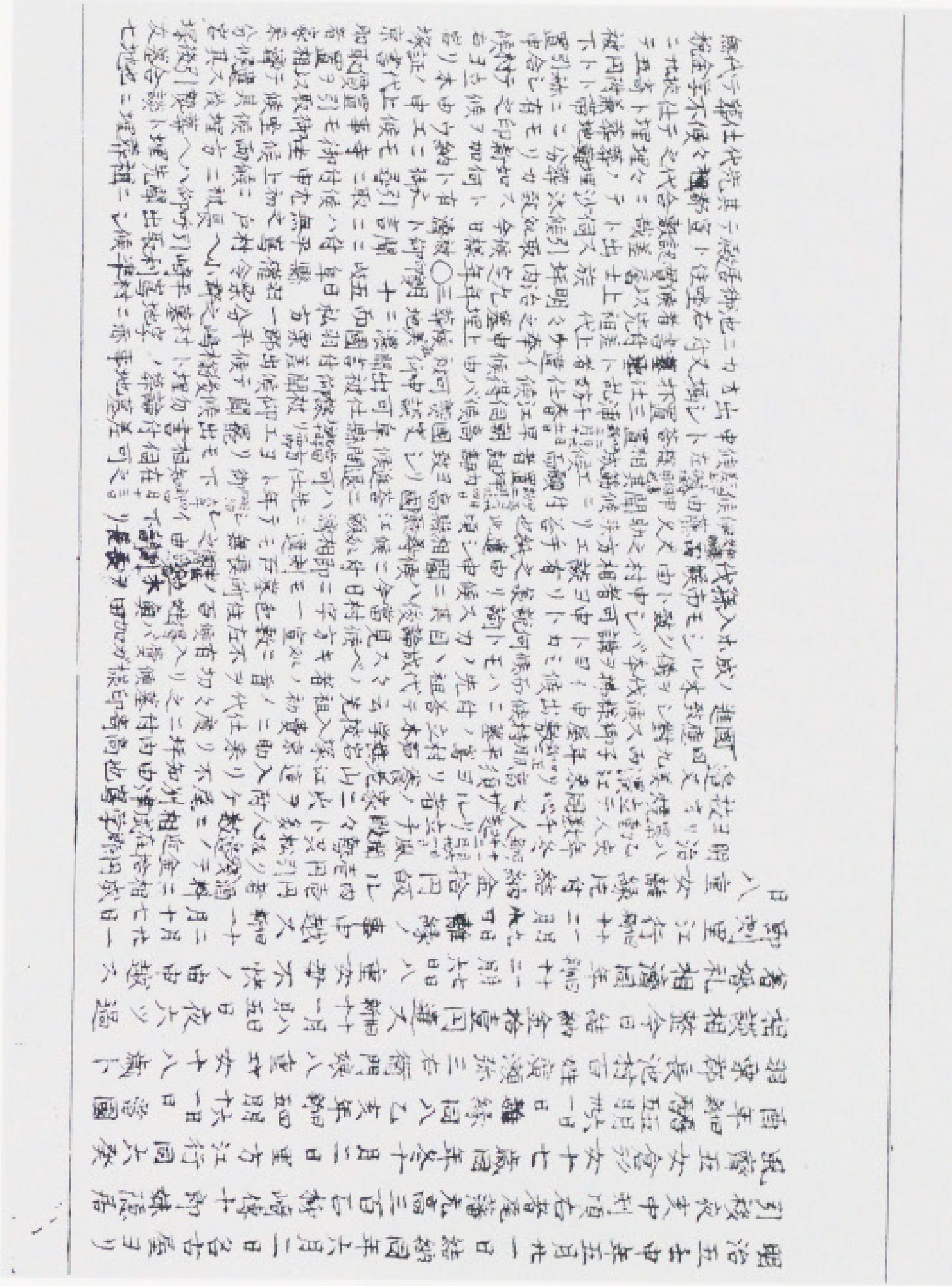
第二百七十二番
神風講社副社長
坪内松太郎
申付候事

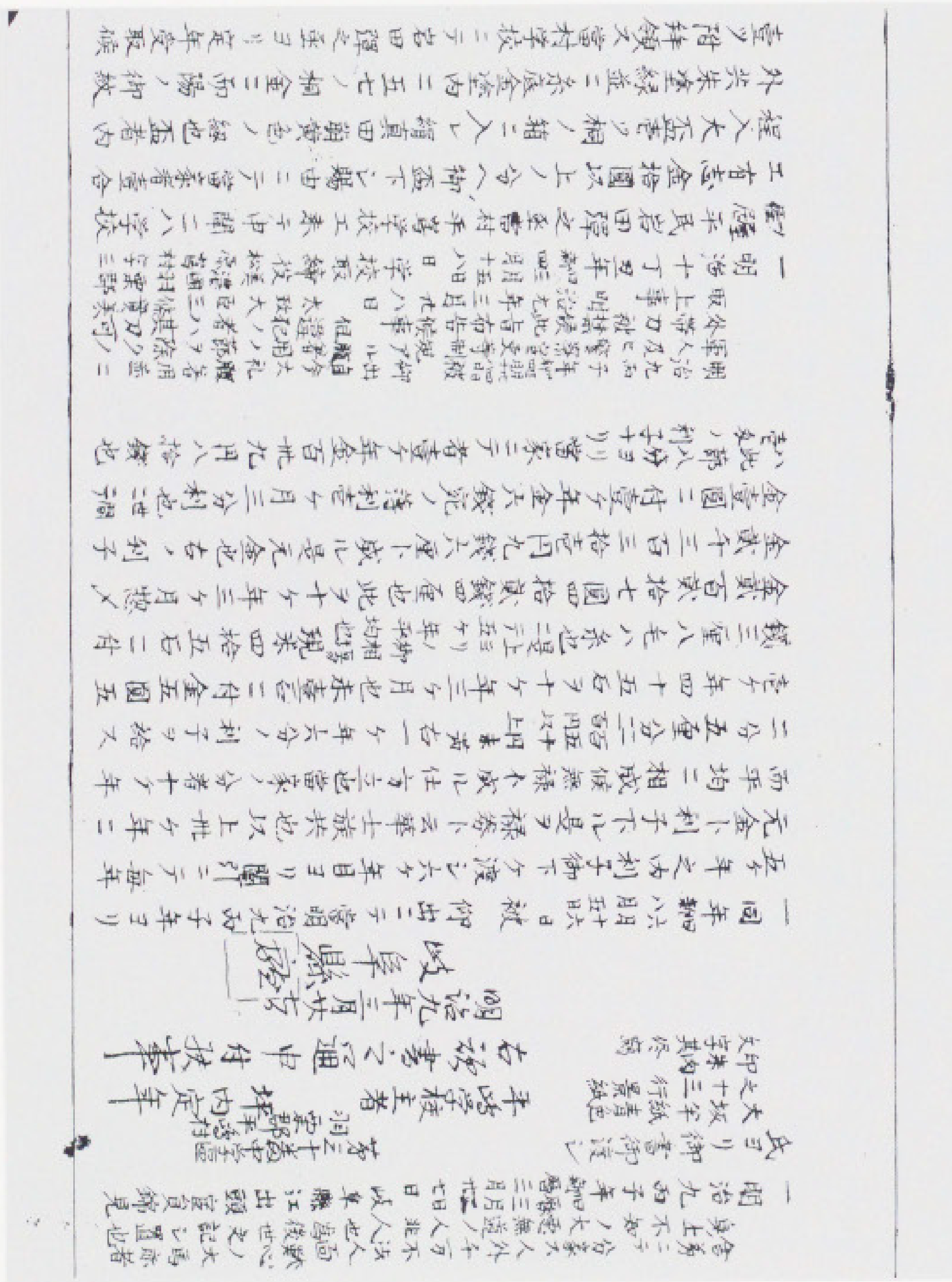
明治七年八月五日 神宮教院 祭主大教正三條西季知

明治二巳己年十一月十五日 元服 烏帽子親用人岩塚錦輔
明治七甲戌年 卯十一月十四日 十一月九二日 是迄ノ通称松太郎ヲ改メ實名定年ヲ通称ニ仕度奉願 御採用 明治五壬申年八月十七日此項一名ニ 家督相續 被 御付候 松太郎ヲ用イ候 定年ト改名 同月 卯十一月十九七日 家督相續奉願候ニ付定年ト改名 家督相續 被 御付候 所八岐阜縣ニ於テ 衆事小崎利準 殿外面人列坐ニテ 被　御渡候家禄之御書付頂戴仕候

現米四拾五石 坪内定年
父高國老衰ニ付隠居
願之通其方ヲ家督
相續申付候事
明治七年十月廿七日
岐阜縣参事小崎利準

之廻六寸 横廻壹尺壱分
紙四ツ折余
本紙ノ通リ鶴
ライ紙





一明治十三庚辰年卯二月廿二日名古屋旧藩太田屋女就石二百ミ子女今年十七歳結納遣ス卯正月廿五日夜六ツ半時頃人力車ニテ著祝盃相濟卯四月十九日旧里江客ニ遣ス卯四月廿一日離縁申遣ス

一同年卯五月廿九日尾州愛知郡名古屋鍛冶町壱丁目尾藩旧高貳百五拾石内藤昌之妹久女今年十四歳慶應四ツ年六月十七日朝ヨリ四ツ時迄ノ内ニ出生也江結納卯六月廿九日尾州名古屋ヨリ引移ル夜四ツ下刻著祝盃相濟ニ付下ノ内藤家ニ於テ

一内藤昌之妹久女本室同胞十人女子久女又姪久宣父又兵衛殿家昌文殿

明治八乙亥歳六月廿五日病死ス

寺院禅寺町禅宗曹洞宗

藤院静翁居士戒名梅室寺

修理亮昌豊ノ後胤也

亮昌豊ノ女房文政十一戊子年生レ今年五十三

同蒲高三百石原源主内

藤原昌義元和元年生レ今年五十三

名古屋御城後室ト三女元禄祥院繁宮寿梁大姉

圓町住居丁目

一明治十三庚辰年卯一月廿七日善帯久女

同十四年

己年卯六月廿八日朝辰ノ中刻頃ノ午前九時三十分男子誕生日十分月極晴天也

明治十三庚辰年卯二月廿二日名古屋旧藩太田屋女就石二百ミ子女今年十七歳結納遣ス卯正月廿五日夜六ツ半時頃人力車ニテ著祝盃相濟卯四月十九日旧里江客ニ遣ス卯四月廿一日離縁申遣ス

一同年卯五月廿九日尾州愛知郡名古屋鍛冶町壱丁目尾藩旧高貳百五拾石内藤昌之妹久女今年十四歳慶應四ツ年六月十七日朝ヨリ四ツ時迄ノ内ニ出生也江結納卯六月廿九日尾州名古屋ヨリ引移ル夜四ツ下刻著祝盃相濟ニ付下ノ内藤家ニ於テ

一内藤昌之妹久女本室同胞十人女子久宣父又兵衛殿家昌文殿

明治八乙亥歳六月廿五日病死ス

寺院禅寺町禅宗曹洞宗

藤院静翁居士戒名梅室寺

修理亮昌豊ノ後胤也

亮昌豊ノ女房文政十一戊子年生レ今年五十三

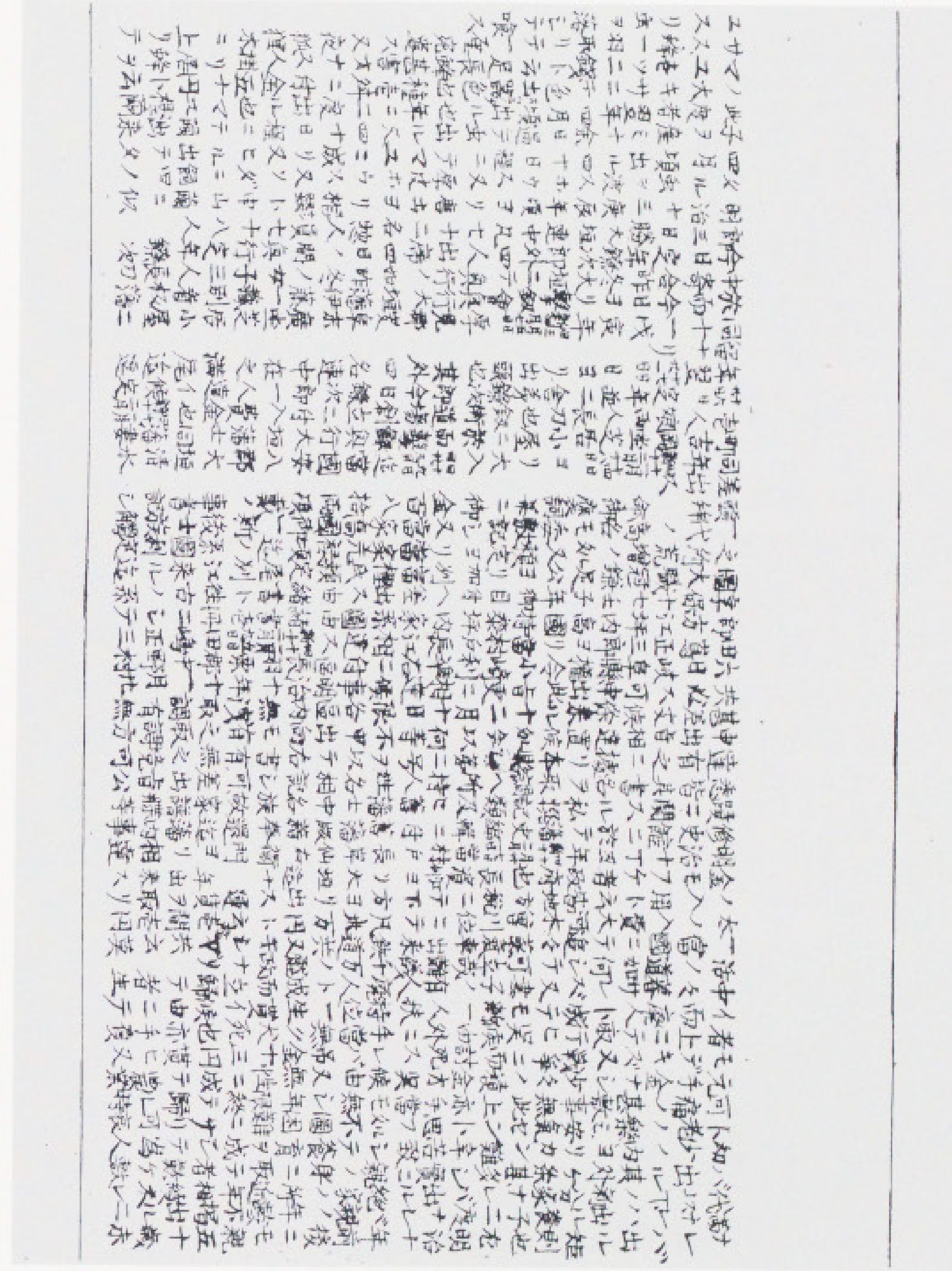
同蒲高三百石原源主内

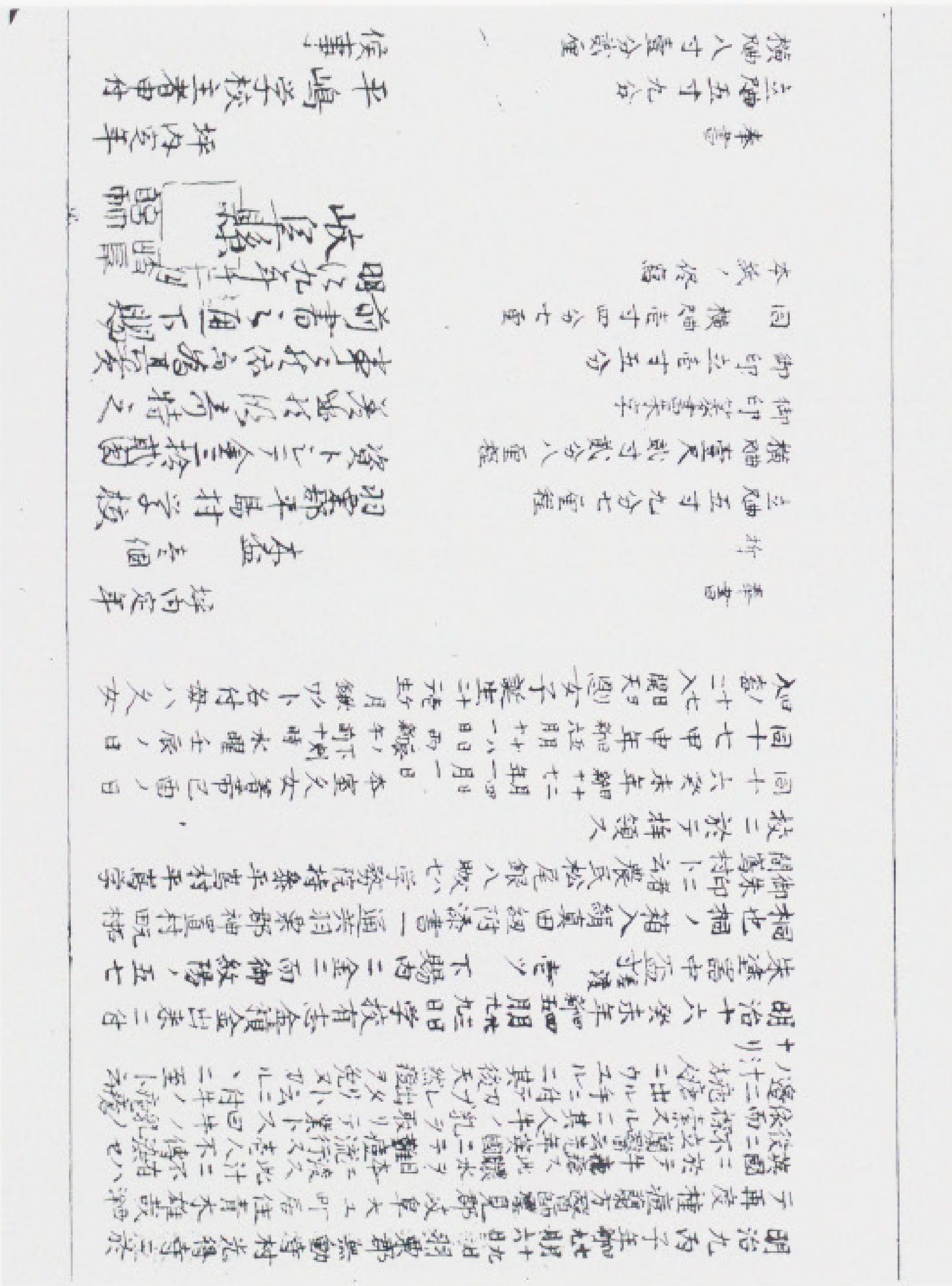
藤原昌義元和元年生レ今年五十三

名古屋御城後室ト三女元禄祥院繁宮寿梁大姉

圓町住居丁目

一明治十三庚辰年卯二月廿二日名古屋旧藩太田屋女就石二百ミ子女今年十七歳結納遣ス卯正月廿五日夜六ツ半時頃人力車ニテ著祝盃相濟卯四月十九日旧里江客ニ遣ス卯四月廿一日離縁申遣ス





先キ壱間明キ四ツ折
本紙ノ通リ寫御印無シ

明治十年十月十日
岐阜縣

紙洋紙半切リ印面朱字
御印朱肉印ノ印面篆書
御印廻壹寸五分四方
ライシ立廻七寸四分四厘
ライ紙横廻九寸八分五厘
紙六折ト上ノ紙イツパイ下ノ處半分
本紙ノ終書ス

坪内定年

（此字段行）金壱圓五拾銭

公公平為其後年賦償附

（此文字十字）右者奇特之至ニ付為賞賞
（九字段行）木盃壹個下賜候事
（十年ノ四字段行）明治十年十月
（此三字段行）岐阜縣
（岐阜縣書）

初度拝領

一御木盃縁方内外皆朱塗内五七ノ桐陽ノ金御紋壹ツ附
御盃差渡シ廻四寸高サ廻壹寸五分糸底差渡シ廻壹寸五
分五厘糸底高サ廻五分壹厘程箱桐外法廻四寸六分四方
高サ廻壹寸四分五厘朽黄色絹裏田紹巾廻三分長サ尺廻
四尺壹寸壹分也

再度拝領

一御木盃縁方内外皆朱内五七ノ桐陽ノ金御紋壹ツ附
御盃差渡シ廻三寸高サ廻壹寸壹分糸底差渡シ廻壹寸壹
分糸輪高サ廻三分七厘程箱桐外法廻三寸五分五厘四方
高サ廻壹寸八分五厘朽黄色絹裏田紹巾廻三分長サ尺廻
三尺貳分也（此御盃之来色少シ黒赤色）

一明治十七甲申年御八月十九日尾州愛知郡名古屋鎮臺
書記雇申（八日當地錦程同年御九月朔日九日濃州羽栗郡笠松郷郡役所ヘ書記雇申（鎮台同年御十月廿日二日本役受附役
拝命ス雇ノ時月給金五圓也同十八乙酉年御八月六日

（朱点）

眼病ニ付辞職願書差出ス同日御聞済
明治十九丙戌年御八月廿日
同廿四日出頭正衛鎮命ス
同廿五日岐阜縣ヨリ御奉書到来明六日午前七時出頭可致旨
同六日岐阜縣ヨリ御奉書到来明六日午前七時出頭可致旨

（朱点）

（朱点）

元上加納村御國町二於テ拝見ス正徳九ツ次ノ時ハ
由詩ノ句ニ
学校奈良田氏ノ子孫ニ
江御順章ニテ正
江ハ岩倉殿御名代坪御
露今長良川鵜飼御見物御忍ヨリ表向岩倉見物ト拵
ヲ見ル御川手村農
ヲ見ル御内高國前夜東白ミヲ
氏石田東方江門行長方特ニ凡上君
ヲ見ル御内坊御國館所境内ニ於テ鮮見ス久
学校奈良田氏ノ子孫ニ
江御順章ニテ正
江ハ岩倉殿御名代坪御
露今長良川鵜飼御見物御忍ヨリ表向岩倉見物ト拵
ヲ見ル御内高國前夜東白ミヲ
氏石田東方江門行長方特ニ凡上君
御船笠ヲ被下ル時ハ一挺人力車ニ乗ル

一 明治廿五年七月廿八日 午後一時 於本郷区真砂小学校

村夕小学校庶務係 教諭 正木直彦

愛媛県伊予郡 東温市 松前町 大字 北川原 三百番地

四十八人 内訳 男子 三十六人 女子 十二人

欠席 二人 遅刻 一人

教師 正木直彦 代用教員 高橋 清 (本校卒業生)

第一 修身 教師 正木直彦 (教科書 『小学修身訓』 第三巻 第十課 「親に孝行なる事」)

第二 国語 教師 正木直彦 (教科書 『尋常小学読本』 巻三 第廿二課 「雨ふる日の学校」)

第三 算術 教師 正木直彦 (教科書 『尋常小学算術』 巻二 第廿五課 「加減混合」)

第四 唱歌 教師 高橋 清 (教科書 『尋常小学唱歌』 第一 「君が代」 「一月一日」)

第五 体操 教師 正木直彦 (教科書 『体操教授法』 第二 「号令と整列」)

第六 裁縫 教師 高橋 清 (教科書 『裁縫教授法』 第一 「運針」)

一 明治廿五年七月廿八日 午後一時 於本郷区真砂小学校

一 同年 同月 同日 午後五時廿分 教師 正木直彦 記

二十四日 久方ぶりに晴れ。朝、霧深し。午後、雨降る。

教師 正木直彦 記

一 同年 同月 同日 午後五時 教師 正木直彦 記

二十四日 久方ぶりに晴れ。朝、霧深し。午後、雨降る。

教師 正木直彦 記

一 明治廿五年七月廿八日 午後一時 於本郷区真砂小学校

一 同年 同月 同日 午後五時廿分 教師 正木直彦 記

二十四日 久方ぶりに晴れ。朝、霧深し。午後、雨降る。

教師 正木直彦 記

（未完）

（未完）

（未完）

一紙一　紙品前ニ同ジ
一立横寸法前ニ同ジ
一折前ニ同ジ
一無印ナリ

一大奉書四ツ切リ
一四ツ折
一立曲七寸壹分也
一横曲九寸五分五厘也
一無印

一明治二十八乙未年新七月廿八日（六月七日）御奉書到來
一洋紙体
一立曲八寸三分也
一横曲五寸七分也
一文字紫色ニテ書キ入レ
一墨ノ在文字墨ニテ書入

一翌廿九日日出頭ノ處書記壹通左ノ通リ毛利藩士長州藩
一本紙極上々間ニ合ヲ

（御印）

給月俸七圓　屬坪内定年

明治廿八年三月廿日

岐阜縣

屬坪内定年

知事官房往復係勤務ヲ命ス

明治廿八年三月廿日

岐阜縣

久保誠之殿ヨリ御渡御書付

（御印）

屬　坪内定年

厚クシテ
スベヨシ

一立曲七寸五分也
一横曲壹尺貳寸八分也
一五七桐並櫻瀧込
一四ツ折四ツ巻
一無印

給月俸八圓

明治廿八年七月廿日

岐阜縣

（御印）

一明治廿八乙未年新十一月十五日清夜午後八時頃博毛入